

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

—東京経済大学 3 学部英語プログラムに関する考察¹⁾—

三宅ひろ子
大和久吏恵
小宮山貴教
関 昭 典
対馬輝昭

I. 3 学部英語プログラムの概要と課題

1. はじめに

社会のグローバル化に伴い、高等教育においては国際通用語としての英語を実践的に活用できる能力の育成が求められている。一方で大学全入化の時代を迎え、学生の学力差の拡大や学習意欲の低下への対応も急務となっている。近年、中央教育審議会が「学士課程教育の構築に向けて」を発表し、学部教育で身につけるべき知識・能力について「学士力」という言葉を使い教育の質の向上を促した。

東京経済大学ではこの現状を踏まえ、2004 年から英語教育の質を向上させるべく、「語学教育検討委員会」を設置して改革を始めた。そこでは「国際舞台で活躍できる人材の育成」「実学と外国語の重視」という本学の建学の精神の実現に向けて、高度な英語活用能力を育成することと、逆に数少なくない英語習熟度の低い学生への基礎教育も充実させるという相反する要請に対応する方策を巡って活発な議論がなされた。その結果示された語学教育検討委員会の答申（2005 年 1 月 28 日付）に基づき、習熟度に応じた英語基礎力の充実と、より高度な発信能力の強化を連動することを目指す新プログラムが、2006 年度より経済学部、経営学部、現代法学部において導入された（以下、「3 学部英語プログラム」と呼ぶ）。

3 学部英語プログラムが施行されて 3 年余が経過した。この間、他大学にもあまり例のない斬新な試みを含む故に、次々と発生する問題点に対処しつつ、少しずつ進歩させてきた。そして、ようやく導入初期の混乱を乗り越え、教育・研究スタッフも強化された。今後は、これまでの取り組みによる成果をさらに伸ばし、逆に浮き彫りになった問題点を克服しつつ、さらなる充実を目指すことになる。

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

本稿では、まず、3 学部英語プログラムの趣旨を簡潔に記し、その後、主要必修科目である「英語 e ラーニング I」のこれまでの経過を報告する。さらに、当科目の具体的な実践例を紹介する²⁾。

2. 3 学部英語プログラムの概要

2.1. 本プログラム設置に至る経緯

本学経済学部、経営学部、現代法学部、及び 21 世紀教養プログラムでは、語学教育検討委員会の答申に基づき全学共通教育センターなど関係機関で協議を重ね、教育理念と目的を次のように明確化した。

(1) 言語教育の理念

異文化理解・受容を可能にする地球的視座で多文化共生の実現を目指す市民、ならびに本学の建学の精神に則り、グローバル社会で活躍できる職業人の育成に資する。

(2) 言語教育の目標

スキルの養成を行う一方で、教養教育・専門教育と関連を持たせながら、コンテンツを重視し、グローバル社会のなかで、市民・職業人として、他者の意見に耳を傾けながら、自らの意見・価値観を形成し、それを日本語・外国語で的確に発信することができる能力を養成する。

全学共通教育センターや各学部では、この中長期的な視点での教育理念・目標と、図 1 に示されるような早急な課題（寺地・野村，2006）の両面から議論を重ねた。3 学部英語プログラムはその議論の結果設置された。

-
- ・学生の英語基礎力低下への対応
 - ・学生の学力・学習意欲のばらつき拡大への対応
 - ・グローバル化に対応する英語発信能力育成の必要性
 - ・到達目標設定と成果点検の必要性
 - ・教育効果の上がるクラス定員（旧カリキュラムでは 35 名）の設定
 - ・TOEIC 受験必修制度に対応する受験準備教育の強化
 - ・非常勤講師とのコミュニケーション向上と FD 活動の必要性
-

図 1 2005 年度の段階で、本学英語教育において至急対応・改善が必要だと指摘された課題（寺地・野村，2006 より抜粋）

2.2. 本プログラムの特徴

(1) 必修英語科目の週 2 回制と 1 年次集中によるインテンシブ教育

旧カリキュラムでは8単位を2年間にわたって分散的に履修していたが、新カリキュラムでは週2回制を導入することにより、すべての必修科目を1年次に集中し、よりインテンシブな教育を実現させた。

前期に週2回開講する「英語コミュニケーションⅠ」は、英語での対人コミュニケーションの基礎力を養成する科目である。一方、後期に開講する「英語プレゼンテーションⅠ」は、前期の英語コミュニケーションの基礎学習を基盤に、やや公的なコミュニケーション能力を養成することを目指した科目である。発信能力を高める両科目では少人数制を重視し、旧カリキュラムからクラス定員を半減させた(15-18名)。使用教材や教授法は担当教員にすべて一任しているが、一方で多面的なFD活動を通じ、出来る限り多くの特色ある教育実践例を担当教員に紹介している。例えば、「英語コミュニケーションⅠ」においては、教員間で授業参観をする「オブザベーションウィーク」を設け、教員間で教授法などの情報を共有する雰囲気醸成を目指した。この取り組みの詳細については小田・土屋(2009)を参照されたい。また、「英語プレゼンテーションⅠ」においても、藤田・山形・竹中(2009)などの様々な効果的な指導実践がこれまでに紹介されている。

(2) 習熟度教育による上位層のレベルアップと基礎力の補強

入学直後に統一的なプレイスメント・テストを実施し、必修科目を習熟度によって3つのレベルに分けて編成し、個々の学生の英語レベルに応じた教育を目指した。テストの選定については、本学独自のテストの作成の可能性を探ったものの、信頼性を検証するのに時間を要することなどから断念し、当面、ELPA(英語運用能力評価協会)によるA.C.E.(Assessment of Communicative English)を採用することとした。

(3) TOEIC 受験対応教育の充実

英語コミュニケーション能力の学生自身による自己点検、及び明確な目標に向けた英語学習を推進するために、1年次生に対してTOEIC IP、もしくはTOEIC Bridge IPの受験を必修とし、受験料を大学が全額負担することにした。また、希望する学生は在学中何度でも無料で受験可能とした。さらに、一定以上のスコアを取得した学生には、英会話学校「ベルリッツ」に業務委託した課外講座「TKU-ベルリッツ・プログラム」への参加資格を与え、受講費を全額大学で負担した。

(4) 英語学習アドバイザーの導入

必修科目「英語eラーニングⅠ」の授業支援、及び英語学習全般のメンタリングを目的に、専任の英語学習アドバイザーを配置することとした。外部業者(アルク教育社)への業務委託で、1年目は本学での留学経験も持つオーストラリア人が担当し、2年目以降は英語学習アドバイザー資格(ESAC)³⁾を所持する日本人が担当した。業務内容は「英語eラーニングⅠ」の授業補助、英語学習アドバイス、ミニ英語講座の実施、ニュースレターの配信など多岐に亘った。なお、英語教員と学習アドバイザーとの連携の手法については、関・阿部

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

(2008) を参照されたい。

(5) 非常勤講師の再編成，特任講師の増員

新カリキュラムの導入に際し，それまではほぼ自動更新されていた3学部の英語担当の全非常勤講師の委嘱を解き，改めて公募した。その結果，約半数の非常勤講師が退職することとなり，新たに多くの非常勤講師を採用した。また，2004年度に導入した特任講師をさらに増員した。特任講師は，非常勤講師との連携やカリキュラム開発の支援，FD活動の運営など，主に教育実践の面での活躍が期待された。

(6) FD活動の充実

新カリキュラムを周知するために説明会を実施した。また，全教員で連携してプログラムを発展させていくことを目指し，非常勤講師を含めたFD活動を積極的に推進することとした。なお，他大学での例も参考にし，FD業務，特に年に数回行うFD会議については，教育力に優れる特任講師による実施・運営に次第に移行していくこととした。

(7) 英語アドバンストコースの設置

「英語アドバンストコース」は，1年次必修教育で実力をつけた学生に対する2年次以降の発展教育の充実を意図して設置した。受講者にはよりレベルの高い少人数授業やキャリア教育を兼ねた講座を受講させ，本プログラムの教育理念にもある「グローバル社会で活躍できる職業人」を養成することを目標とした。

英語カリキュラム
(経済・経営・現代法学部 2006年度～)

1年次生

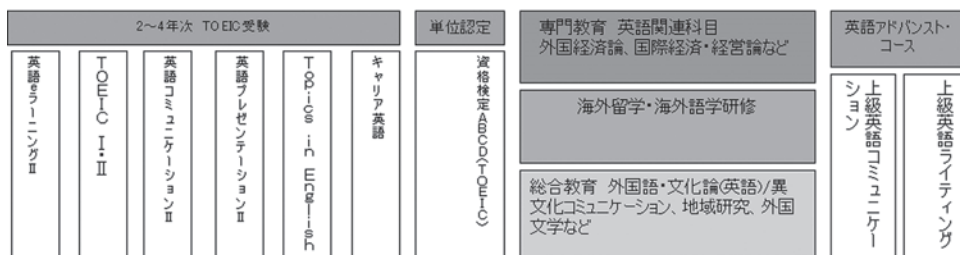
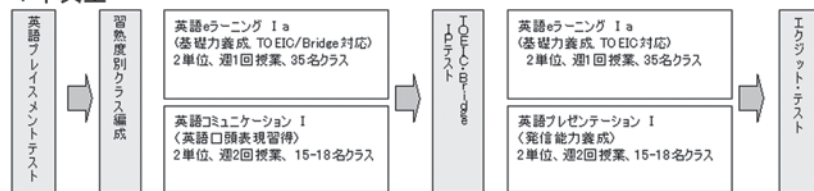


図2 3学部英語プログラムのカリキュラム (関, 2009)

(8) エントリー／エグジット・テストによる成果点検

本プログラムの成果点検の一環として、「英語 e ラーニング I」の授業において、5月と12月に英語コミュニケーション能力テストである CASEC (Computerized Assessment System for English Communication) を受験させた。また、定期的にアンケート調査を実施し本プログラムの成果や学生の動向を把握した。

3. 必修科目としての「英語 e ラーニング I」の導入

3.1. 「英語 e ラーニング I」導入の経緯

3学部英語プログラムの原案に対する学内の諸会議においては、それまで一切導入されていなかった CALL (Computer Assisted Language Laboratory) 及び「e ラーニング」の教育内容や予想される教育効果について議論が集中した。そして、一部に批判的意見があったものの、全体的には、斬新な試みとして推進に賛成する意見が多数を占めた。

また、e ラーニングを可能にする環境整備には多額の費用がかかることから、あたかも改革の目玉であるかのような印象を与えたが、実は、本プログラムの主目的は e ラーニング自体にあるのではなく、e ラーニングを有効利用することにより学生に学びの機会を豊富に与え基礎力を養成し、同時に、発信能力 (コミュニケーション能力 + プレゼンテーション能力) を少人数、週2回の集中的な教育によって活性化させるというものであった。e ラーニングの導入について、当時の資料や関係者のコメントを要約すると以下の通りである。

(1) 基礎力の養成

学生の英語基礎力の全体的な低下に対応するためには、初級レベルの英語力を養成することから始めなければならない。しかし、英語に対する苦手意識を大学まで引きずってきた学生に対して、中学・高校と類似した手法で挑んでも学生の意識を変容させることが困難である。そこで、最新のテクノロジーを駆使した e ラーニングを導入することで、学生にインパクトを与え、新たな気持ちで英語学習に取り組む意欲を喚起することを意図した。

(2) 指導方針の統一

旧カリキュラムでは、各教員が独自の指導目標と教授法に従って授業を行っていたが、同一必修科目で、担当教員によって難易度やテーマが大きく異なるのは問題であるという指摘が強くなり対応を迫られた。そして、e ラーニングを導入すれば、統一教材を使いつつも、多様なコンテンツの中から各教員が使用教材を選択できるので、教材の統一化により教員の創意工夫を奪ってしまうという障害も避けられると考えた。さらに、非常勤講師への依存率の高い本学の英語教育の質を向上させるには、非常勤講師の再編成が必要と考え、非常勤講師の委嘱を一旦打ち切り、e ラーニングによる英語の指導にも関心を示す教員を、改めて公

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

募で採用し直すこととした。

(3) 習熟度の低い学生への対応

英語担当教員に聞き取り調査をしたところ、英語の習熟度の低い学生の指導に苦心しているというコメントが多く寄せられた。これは、昨今、多くの大学が共有する実態である。そこで、英語基礎教育において先進的な取り組みをしている大学に実際に調査に出かけて情報収集をした。すると、本学と似た特徴のあるいくつかの大学で、CALL 及び e ラーニングが積極的に活用され効果を上げていた。さらに、それらの大学の特徴として、CALL 機器の活用方法や e ラーニングの効果的な指導法に関する FD 活動が積極的に行われていることもわかった。これらの他大学調査の結果、e ラーニングは、取り組みの工夫次第で教育効果を高める可能性を秘めた教育手段であると判断した。

3.2. 「英語 e ラーニング I」の概要

本プログラムでは、英語基礎力育成のために、個々のレベルに合った学習教材を用いて自分自身のペースで学びを進めることができる教授法として、学会などでも注目されていた CALL (Computer Assisted Language Learning)、とりわけ e ラーニングに着目した。e ラーニングを活用することにより、学生は授業内に留まらず、インターネットにアクセスできるコンピュータさえあれば場所を問わず英語学習に取り組むことができる。e ラーニングのこの利点を活かし、授業内外での自主的な英語学習を促進しようと意図した。そして、そのための設備投資も行った。ただし、英語学習への確固とした動機づけを持っていない学生も受講する必修科目においては、授業外での個人英語学習を奨励しても、必ずしもこちらの思惑通りに学生が行動しないことが予測された。そこで、教員が直接指導にあたる授業の他に、専任の学習アドバイザーの支援を受けつつ e ラーニング教材に取り組む「課題学習」のコマを週 1 回設定し、出席を義務付けた。

また、全学生を対象とした必修科目である以上、ある程度は共通のシラバスで統一性を持った方がよいという意見が、語学教育検討委員会や 3 学部英語教員会議において出された。それに対応し、同委員会が中心となり他大学の実践例などを調査した結果、アルク教育社の e ラーニング総合教材である“ALC NetAcademy”が適切であると判断し共通教材とすることとした。教材選定の主な理由は、この教材のみで英語の基本をある程度網羅できること、教師の力を借りずにも、学習者自身の力である程度学習を進めることができること、さらに、会社による保守管理やサポート体制が充実していることなどである (寺地・野村, 2006)。なお、「英語 e ラーニング I」の授業等詳細については、付録 1 を参照されたい (授業内容は毎年改良されているが、付録では 2008 年度のものを掲載する)。

3.3. 「英語 e ラーニング」における 2006-2009 年度の取り組みの経過

「英語 e ラーニング I」は 2005 年度後期の試行期間を経て 2006 年度に導入されたが、実際には 2006 年度は試行錯誤の期間であり、2007 年度にようやく実施体制が確立したとあってよい。この間、担当教員は新たな教授媒体やそれに伴う教授法の変化に戸惑いながらも、ALC NetAcademy を基本教材として、学生の英語基礎力や動機づけを高めるための様々な工夫を入れた授業を試みた。さらに、「課題学習」の取り組み方の指導も各担当者独自の手法で行ってきた。

この形式の授業は、結果として、学生へのアンケート調査ではある程度高い評価は受けたものの（寺地・関，2007）⁴⁾、実際の指導過程では様々な教育上、運用上の問題が浮上し、その都度対応を迫られた。以下に一部を紹介する。

(1) 環境上の課題

本科目専用の、e ラーニング教室を 5 教室設置し、英語学習のための先進的な環境を目指した。しかし、いずれの教室も、結局は予算上の問題で CALL 機器は導入することができず、授業人数分のコンピュータにヘッドホンを備えただけの施設となってしまった。そのために、必ずしも、CALL を活用した教育本来の利点を活かすことができなかった。

① 教員のパソコン画面を学生に提示できない

学生がコンピュータ教材を活用して学習を適切に進めるために、教員が手本を示すことが不可欠であるが、教員のパソコン画面を学生に提示できないために口頭説明で手本を示さざるを得なかった。しかし、パソコン画面上の動きを口頭で説明するのは困難を極めた。

そこで急遽予算要求をし、簡易プロジェクターとスクリーンを設置したのであるが、スクリーンが小さすぎて教室後方の学生には見にくく、説明の都度、全員を教室前方に立たせて行わなければならなかった。

② 個々の学生のパソコンの画面を教員卓上でモニターできない

CALL 機器には、教員が個々の学生のパソコン画面をモニターし、ヘッドホン上で学生一人一人とやりとりをしながら学習を進めていく機能があるが、与えられた環境ではそれがかなわず、学生の取り組みを把握するために、機器と学生で密集した教室内を常時巡回視せざるを得ず、授業運営に支障をきたすことがあった。また、教員が前方で説明している最中に、後方の学生が授業とは無関係のインターネットサイトを閲覧するケースがあることは知っていても、学生のパソコン画面を確認できないために、その行為を発見し指導することすらできなかった。

そこで、2008 年度より、応急処置として教師卓のコンピュータ上に学生の画面を小さく表示し、学生のパソコンを教師側で操作できるように改善した。これにより以前よりも状況は改善したが、しかし、CALL を活用して教師が個々の学生に的確に支援をできる状態とは

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

程遠いと言わざるを得ない状況が現在まで続いている。

③ 学生間でのインタラクティブの活動ができない

ヘッドホンを通して教室内の学生とペアワークやグループワークができる機能が LL や CALL 機器には必ずついているのであるが、それもないために教室内での学生間のインタラクション活動が困難になってしまった。言語学習教室の環境としては致命的な欠陥である。さらに、狭い教室に必要な人数分のパソコンを無理やり設置したので、学生が教室内を移動しながら他学生と英会話などの練習をすることも困難であった。

残念ながら、この問題について、これまで有効な改善策を講じることができずに現在に至ってしまっている。しかし、このような限られた環境下でも、多くの担当教員が学生間のインタラクションの機会を保証しようと細かな工夫を重ねながら（例えばメールやチャット機能を活用した取り組みなど）何とか窮地を凌いでいる状態である。

(2) 指導上の課題

共通教材である ALC NetAcademy では、基本的にすべての活動をパソコン上で行う。さらに、画面上の文字を読み、マウスをクリックするだけでほとんどの作業を終えることができてしまう。確かに、操作が簡単で構成も単純であるために、パソコンの操作が苦手な教員や学生でも十分に対応できるのは利点と言える。

反面、単にパソコンの指示に従って学習を進めていくだけでは学習効果を必ずしも高めることができない。筆者と本学の元特任講師は、ALC NetAcademy で学習を重ねても英語の基礎力が身につかないのはなぜか知るために学生に聞き取り調査をしたことがある。すると「勉強をした気がしない」、「ただ見ているだけで眠くなる」、「集中力が続かない」と答えた学生が多かった。実際、教師のいない「課題学習」における学生の学習実態を直接確かめるために教室を定期的に訪れたが、そこでは、学習に集中できず眠ってしまう学生や友人との雑談に勤しむ学生、さらには英語学習とは無関係の動画を平気で閲覧し続ける学生など、英語学習に集中しているとは決して言えない学生が後を絶たなかった。

この状況を改善する方策の1つとして、書く作業を取り入れることが必要だと我々は考えた。つまり、パソコン上に示される重要単語や表現を書き出して覚える。重要な文法項目を含む文を書き出し、その文法について調べて書くなど、目で見ただけの情報を書記化する作業により、知的記憶のみならず運動記憶を利用して知識を身につけさせる必要があると判断した。そこで、ALC NetAcademy の開発会社であるアルク教育社の協力を得て、その年度内に『ALC NetAcademy ワークブック 基礎英語コースリーディング編』（関・ラグレカ、2008）（図3）を完成し、翌年度から使用を開始した。このワークブックは、文章の内容理解学習、語彙学習、文法学習などを、パソコンとリンクさせ、書く作業を多く取り入れるように構成を工夫した。

ネットアカデミー 基礎英語コース リーディング

インターネットの 素晴らしい世界

ユニット 01

text ユニット01を始める前に

本ユニットのテーマであるインターネットについて、以下の質問に答えましょう。

- あなたは普段、どんなことにインターネットを使っていますか。
- あなたがよく使うウェブサイトを3つ挙げてみましょう。
- メールのやりとりをするときに、どんなことに気をつけていますか。

One Point Advice

インターネットは、情報の検索や発信、買い物や、人との交流など、多様な用途のために活用することができます。また、さまざまなウェブサイトが、情報の提供や発信、指示板、ブログなどの多様なサービスを提供しています。

Step 1 First Reading リーディングスピードを計ろう

右の空欄のうち、上段に Step 1 First Reading でのリーディングスピード WPM を記入します。学習後、下の段に Step 4 の Phrase 1 の WPM を記録すれば、学習の前で文章を読むスピードがどの程度上がったのかを確認できます。

学習前	/ WPM
学習後	/ WPM

Step 2 Quiz Time クイズに答えよう


パソコンで開いた NetAcademy の Step 2 の Q1 ~ 3 に答えましょう。答え合わせをする際は、「解説」と「基本ポイント」も必ず読みましょう。

Step 3 Discovery 英文の内部理解を深めよう

text NetAcademy の Step 3 に進み、注釈や日本語訳を使って、英文の理解を深めましょう。学習を終えたら、本テキストの以下の指示に従い、語句や文法事項を復習しましょう。

Vocabulary 読め

本文に登録した語句を使ったクロスワードパズルです。ヒントをよく読んで、空欄に当てはまるアルファベットを記入しましょう。なお、○の付いたヒントは同義語・類義語で、×の付いたものは反意語か対になる語であることを示します。答えが2語以上の語の場合、単語間のアキは必ず記入してください。



ACROSS のヒント

- make contact, meet, talk, chat
- a place on the Internet, a location connected to the Internet
- method, style, process, manner, approach, how
- cause, basis, motive, explanation
- hold, keep, freeze, preserve

DOWN のヒント

- always, throughout, whenever
- excellent, fantastic, great, super, awesome, cool
- discover, get to know, see how
- connected to a computer or the Internet
- at no time, not once, not at all

Grammar & Usage of Phrases 文法と句の用法

名詞の役割をする動詞の -ing 形

解説 第2段落の2文目に出てきた、以下の文を見てください。

① Playing computer games online is also fun, ...

下線部は、「オンラインでコンピューターゲームをすること」という意味で、この文の主語となっています。つまり、動詞 play (ゲームなどを) するの -ing 形が、名詞の役割を果たしているのです。このような、名詞の働きをする動詞の -ing 形が動名詞です。動名詞は一般に「～すること」や「～したこと」と訳すことができます。

次の英文を、下線部に矢を付けて日本語に訳しましょう。

(1) Swimming is good for your health.

(2) Studying English is a lot of fun.

the way を後ろから説明する方法

解説 the way (方法、やり方) の内容を説明するには、the way に文の形を続ける方法があります。その例が、以下に引用した、本文第2段落の最後の文です。

② They are changing the way _____ (the way を説明する部) _____ (that in which) _____ (we understand each other) _____ (S) _____ (V)

ここでは、the way を、we understand each other という主語 (S) we と understand (each other) という述語 (V) からなるまとまりが説明しているのです (このような主語と述語からなるまとまりを節と呼びます)。

なお、the way と we 以下の節との間には、that または in which を挿入することができます。

カッコの中の手続きを、正しい順番に並べ替えます。

(1) This is the way that [meetings / have / always / we].

(2) The way that [hat / she / her / wears] is very unusual.

Step 4 Speed Reading

text NetAcademy の Step 4 に進みます。Keyword を選択し、First Reading の結果を参考にスピードを設定してから、キーワード単位で読み進める練習を2回以上行いましょう。文の流れが分かったら以下の Practice に進み、キーワードだけを見て、そこから理解できる内容になるように、日本語の続きを書いて文を完成させましょう。

One Point Advice

キーワード (主に名詞・形容詞・動詞・副詞【の役割をする語】) を把握すれば、英文の大意はつかむことができます。これらを意識することを習慣付けましょう。

Practice

- Web sites, Internet, English (漢3文)
- My friends, I, use, e-mail (漢5文)
- friend, lives, Canada (漢3文)

(1) インターネットのウェブサイトでは……

(2) 筆者は友人と連絡を取るために……

(3) 筆者の友人は……

まとめ

text 最後に Step 4 の Phrase 1 を使って、もう一度本文を読みましょう。今回測定されたスピード (WPM) を7ページの Step 1 の空欄に記入し、変化を確認しましょう。

図3 『ALC NetAcademy ワークブック 基礎英語コースリーディング編』 (関・ラグレカ, 2008:pp. 7-10)

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

(3) 成果点検手法の課題

日本の大学教育においては、これまで成果点検が十分に為されてきたとは必ずしも言えない。その背景には、効果を短期的な観点で点検することへの疑問、教育権が個々の教員にあるという考え方、また、大学教育現場において教育成果点検についての議論がまだ未成熟であることなどが挙げられよう。しかし、今や大学は全入化時代となり、文部科学省が発表した「学士課程教育の構築に向けて」においても、学習成果の重視や大学全入時代における「出口管理」の実施などを通じ、学部教育の質を維持し向上させる必要性を強調している。

本プログラムを構築する段階でも、この点について議論がなされた。そして、文部科学省等の強調する成果点検が、数値のみで表される表面的な検証に陥る危険性があることを踏まえつつも、大学の学部教育の質を確保するために、数値測定を含めた客観的な成果点検も必要であるという判断に至った。その結果導入されたのが、CASECである。本テストのスコアの伸長状況により本プログラムの成果測定を試みることにしたのである。以下、他の試験に加えて本試験の導入により学生が直面することになった現実を記す。

学生は、4月の入学式翌日に、必修英語科目のプレイスメント・テストとして前出のA.C.E.を受験する。その結果を元にクラス分けが行われ授業が開始される。次に、5月に本プログラムの成果点検のためにCASECを受験する。そして、5月下旬、ほぼ同時期にA.C.E.とCASECの結果が学生に開示される。7月下旬には学内の定期試験を受験し、さらにTOEIC IP（もしくはTOEIC Bridge）を受験する。その結果は9月中旬に学生に開示される。後期に入り、11月に再びTOEIC IP（およびTOEIC Bridge）が実施され、7月に未受験だった学生に加え（7月に諸事情で受験できなかった学生は受験必修）、前期に受験した学生も再度受験することを強く推奨される。そして、12月にはCASECを再度全員が受験する。その結果は1月に返却される。最後に1月末に学内定期試験を受験する。

これらの一連の試験日程について、学生の負担が重過ぎる、さらに、試験で成果が上がる学生はいいが、何度試験を受けても結果が変わらない（もしくは悪くなる）学生はやる気を失ってしまうという指摘が教員内で相次いだ。確かにもっともな指摘である。英語の専攻ではない大学で、英語を必要とする差し迫った理由は特になく、あいまいな気持ちで英語学習に取り組む学生が7割を占める本プログラムにおいて（Seki & La Greca, 2009）、これだけの量のテストを入学初年度にこなし、結果を客観的に分析できる程に英語学習に成熟する学生はごく少数であろう。そこで、学生の過度な負担を取り除くために、2008年度からCASECを一時中止することとした。しかし、その結果、本プログラム必修教育の成果を数値で判断する手段の1つを失うこととなった。今後、既に導入している試験の配置方法を再検討することなどにより、数値による客観的な成果点検をより適切な形で再開することを視野に入れる必要がある。

4. まとめ

本プログラムでは、カリキュラムの充実とともにFD活動を充実させ、担当者全員の協力でプログラムを発展させるという意識を教職員に根付かせることを重視した。その一環として、定期的にFD会議を実施し、先進的な取り組みをしている教員に報告をしてもらい、参加者で議論を深めた。また、科目ごとのメーリングリストを開設し、ネット上で指導法についての情報交換も行った。さらに、Moodle⁵⁾を活用した情報共有も次第に発展してきつつある。

ただし、「英語eラーニング」に限って言えば、他の必修科目（「英語コミュニケーション」、 「英語プレゼンテーション」）と比べ、前述したように次から次へと出現する問題点に翻弄されることが多く、教授法について具体的に議論するまでには至らなかった。しかし、担当教職員の地道な努力の末に、最近ようやく初期の混乱期を脱しつつある。さらに運営体制も改善され、指導上の具体的かつ発展的な議論も教員間で頻繁に交わされるようになった。eラーニング教材をより効果的に活用するために作成した小テストを、担当教員間で共有する協調的な活動も見受けられるようになった。今後は、CALL及びeラーニングを利用した英語教育をさらに進歩させるために、教職員間で一層協力し、英語基礎力を養成する様々な教授法を開発し実践していきたい。（文責：関昭典）

II. 「英語eラーニング」における学習モチベーションを高めるための実践例

1. 実践例1：ラポール形成と文法解説指導

1.1. はじめに

筆者が初めてeラーニングを体験したのは2002年のことだった。やや特殊な資格試験を受験するため、受験準備に対応した教育機関を探していたのであるが、対面型授業を提供する機関は少なく、価格も割高で、何よりもスケジュールが合わずに困り果てていた。そんな折にたどり着いたのが、eラーニングという学習形態であった。早速オーストラリアの企業が開発したコースを始めたが、内容が優れただけでなく経済的・時間的な問題が解消され、その利便性に感動したことを覚えている。その後、留学先でInternet Technologyのクラスを受講し、第二言語習得におけるITの歴史や、Warschauerほか（2000）をはじめとする研究者の実践報告に触れ（McCarthy, 2004）、ウェブ上に次々と発表されるeラーニング用のコンテンツを眺めるうちに、近い将来eラーニングが日本の多くの大学でも導入されるようになっていくと感じていた。

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

e ラーニングの授業運営に興味を持ち始めたのは、ある大学でリスニングの授業を担当するようになってからである。CALL 教室が割り当てられ、初めて触れる機器に悪戦苦闘しながらも、従来の黒板と机という教室には存在しえなかった学習の可能性を目の当たりにできたことは、よい経験となった。

実際に授業を運営すると、e ラーニングの利点ばかりではなく、e ラーニングでは実現できない学習があることや、教師の果たすべき新たな役割についても思考するようになった。そこで青山学院大学 e ラーニング人材育成研究センターが提供する学習支援（メンタリング）専門コースを受講した。このセンターでは他にインストラクショナルデザインなど 5 種類ほどの e ラーニング提供者側の専門コースを提供していたが、教材あるいはシステムと学習者とを仲介し、学習者の支援に直接携わることのできるメンタリング・コースが、筆者のニーズを最も満たすものだと判断した。

2008 年度から東京経済大学の「英語 e ラーニング I」クラスを担当するにあたり、上記に挙げた e ラーニングにおける筆者の体験および経験を活かして、学生の言語習得に貢献することを目標にクラスを運営してきた。その結果、e ラーニングで期待される自律学習を確立するには、対面指導と個別指導におけるラポールの形成が必要であることが確認された一方、学生の習熟度に適した教材を与えなければ、思うような成果が期待できないことがわかってきた。以下はこの二点に関する実践の報告である。

1.2. 授業開始

e ラーニングの教室に入り驚いたことは、学生間にデジタル・ディバイド（IT を使う能力の格差）が存在していたことである。携帯電話の複雑な機能は使いこなせても、コンピュータからは電子メールを送ることができない、検索ボックスに単語を入れて検索をすることすらできない学生がいる一方、高校時代にしっかりと情報教育を受けてきて、ホームページさえも自ら作成できる学生もいたのである。

しかし、テクノロジーの習熟度に差はあるにせよ、本学の新生として同じスタートラインに立つ学生たちを長期的に動機づけるために、最初に試みたのは学習環境の整備であった。学生が主体的に e ラーニングに取り組むために教師は何ができるのかを考えたときに、参考となったのは Dörnyei の提示した例だった⁶⁾。具体的な手助けを提供する、個々の学生に個別に内容を説明する、学習がうまく進んでいないときには心配していることを示すなど、対面授業とはいえども個別に学習する時間が多くなる e ラーニングのクラスでも、実践・応用できる例が多く含まれていた。

まずはコンピュータ操作のレベルで置き去りにされる学生が出ないようにするために、新しい作業をする際にはその手順をホワイトボードに書いて説明し、学生が指示に従って機器を操作している間は常に机間巡視を行い、作業が順調に行われているかを確認しつつ、授業

を進めた。1ヶ月もすると、学生たちは基本的な操作を覚え、口頭による活動手順の提示のみでもできる作業が多くなった。しかしパスワードの不一致や、パソコンの故障、学習記録が正常に作動しない、教師にメールを送ることができないなど、小さなトラブルは常に発生し、学生も教師もトラブルの対処に苦慮した。

次に心がけたのは、学生との信頼関係を構築することだった。例えば、シラバスを配布して評価方法を明確に提示することにより、学生の学習目標を具体化した。また、ネットアカデミーのトピックと関連した記事の抜粋を使ったり、授業開始時に行ったアンケートで学生の要望が高かった映画や音楽を使った楽しめる活動も取り入れた。映画に関しては、教室に設置されているスクリーンのサイズが小さすぎたことや、教師卓のコンピュータから学生への画像配信が不可能だったこと⁷⁾などハード・ソフトの両面において問題があり、ディクテーション活動などが十分に行えなかったのが残念だった。しかし、多少の問題を抱えつつも、学生の要望を授業活動に取り入れたのは、学生に自分たちの要望が授業に反映されること実感させ、そのことによって「要望が高かったものは可能な限り授業に取り入れていく」と教師がアンケートをとる際に学生とした約束が守られていることを知らせる狙いもあった。

個々の学生への対応としては、まず、学生がメールで提出する「課題学習」の課題に確実に目を通し、必ず一言コメントを記して返信することを心がけた。学生の中には、メールに自分の名前を記載しない、あるいは一言の挨拶もなく、送る情報の簡単な説明すらつけずに内容のみ送信してくる者もいるなど、メールでの情報交換のマナーに欠けるケースも少なく、その都度、指導を行った。また、メンタリングの一環として、課題の提出が滞っている学生にはメールを送り、励ましの言葉をかけつつ課題提出を促したり、特別な事情で提出が困難な場合には相談するようメッセージを伝えた。すると、こちらからの積極的な働きかけに学生は次第に心を開くようになり、学生からの発信が増え、単に課題の提出に留まらず、筆者が授業中に発した何気ない問いかけへの答えを書いたり、授業で扱ったトピックに関する自らの知識を披露したり、直接学習相談に訪れるようになった。教員側が学生の意向を受け入れ、メンタリングを適切に行いながら指導を行うことで、徐々にラポールが築き上げられるということを実感することができた。

1.3. ニーズ分析

課題学習の後、学生から送られてくるメールをチェックしている中で、毎週課していた『ネットアカデミー・基礎英語コース・ワークブック（リーディング編）』の「Grammar & Usage of Phrases」（付録3）の部分を学習しない、あるいは間違いが共通していることに気がついた。指導する学生の中には高校までに習得すべき文法事項を理解していない者が多く、そのためユニットが進むにつれ、ワークブックの文法解説を読んでも自力で理解することが困難になっていたのである。前期末に行った本学共通の授業アンケート調査の自由質問欄で、

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

「教員による事前の Grammar & Usage of Phrases の解説が必要か」を問うたところ、約 7 割が「必要」と答えた。

当時は、課題学習の時間に 1 ユニットの学習させ、次の対面授業内でその内容確認テストを行っていた。その内容は、具体的には NetAcademy のテスト作成機能を使い、本文に 10 個の空欄を設け、日本語訳を参考にしながら空欄に適切な語を選ばせるというものであった。このテスト形式の問題として、本文の内容理解度は測定できても、各ユニットで焦点を当てられた文法事項の理解度を的確に測定できなかったことがあげられる。

そこで後期からは、課題学習で指定したユニットの「Grammar & Usage of Phrases」で扱われる文法項目や重要表現を、対面授業時に予め指導することにした。その際、ワークブック内の練習問題を直接使うと学生には難しすぎることも少なくなかったため、自作プリントにて対応することとした（付録 3）。このプリントを作成するにあたっては、扱われる文法事項に学生が確実に着目できるように工夫した。難易度も少し下げ高校 1 年次に用いる文法書を参考にして、主に中学で学習するレベルの語彙で対応できる問題を作成するよう心がけた。

また、あえて全訳させる問題を多く提示することで、学生が文の構造を把握し、その文法事項が文中で果たす役割を理解できるようにした。この自作プリントの指導手順としては、まず筆者が解説し、その後学生に設問を解かせ、机間巡視により 8 割以上の学生が解答し終えたことを確認した後、学生とのインタラクションを通じて解答を確認した。

このプリント学習の所要時間はおよそ 20 分程度でしかなかったが、毎週続けているうちに「Grammar & Usage of Phrases」に積極的に取り組む学生が増え、設問の正答率も飛躍的に向上した。しかし、それでもなお誤答が目立った場合には、次の授業内で再度解説し、理解の定着をはかることにした。また内容確認テストも、本文の空欄補充に加えて、直前の授業で配布・解説したプリント中の文法問題も含めることで、学生が必ずプリントの復習をするよう改良した。

このような取り組みの結果、後期の授業アンケートでは「文法の解説があって役に立った」と記述する学生もおり、ワークブックを補強する自作プリントの活用は好評だったようである。授業中の学生の反応を観察する限りでは、この取り組みの効果に確信を持つことはできなかったが、学生の、課題学習における「Grammar & Usage of Phrases」の学習法が改善されたことや、後期末に行った本学共通の授業アンケートや授業内アンケートの結果から、学生の英語力の向上とそれによる満足感の強化など一定の効果があったことが推測できた。

1.4. まとめ

以上、2008 年度の「英語 e ラーニング I」で行った指導の一例を示した。指導過程では、学生間にデジタル・デバイドが存在したこと、学生全員がコンピュータの基本操作を習得

するのに予想以上に時間がかかったこと、機器の故障が多かったことなど、様々な障害もあった。そこで初年度の反省を踏まえ、eラーニングによる英語指導において重要となるポイントを二点指摘する。

一点目は、教師は、基本的なコンピュータ操作とeラーニング教材の操作方法に習熟するべきであるということである。想定されるトラブルに即座に対応する方法も身につけておく必要がある。そして、二点目は学生のニーズ分析と学生とのラポール形成の重要性である。eラーニングの授業ではあるが、コンピュータにすべて依存する授業では学生の学力を伸ばしモチベーションを持続させるのには不十分である。そこで、対面指導も適切に行うことや、教材の難易度と学生の言語習熟度を判断し、両者に隔たりがあるなら指導を加えることが必要となる。

1年間の「英語eラーニング」の授業を通じて、学生が本科目で学ぶことによりコンピュータを活用しより効率的に英語力を高めることができるだけでなく、英語学習における自律性を伸長し、コンピュータ・リテラシーやEメールでやり取りをする際のマナーも習得できることを理解できた。今後もさらに指導上の改善を重ね、本学の「英語eラーニング」の発展に貢献していきたいと考えている。(文責：大和久吏恵)

2. 実践例2：筆記活動と学習記録ノート

2.1. はじめに

以前とは異なり、パソコンの操作に慣れている新生が増えてきているが、パソコンを使って英語を学習したことのある学生は少ない。そのため、「英語eラーニングI」の授業が始まる4～5月頃は、多くの学生がALCのNetAcademyに対して、「新鮮な勉強方法だ」、「ゲーム感覚で面白い」といった感想を述べながら、クリックやタイピングで英語を学べることを楽しんでいる。また、なかには「タイピングをすることで、曖昧にしか覚えていなかった単語のスペルを確認できる」といった気づきを得て、喜ぶ姿も見られる。

しかし、しばらくすると、あちらこちらからそれまでとは異なる声が聞こえるようになる。「手元に、自分の書いたものが何も残らないのは不安である」、「手で書いて勉強したい」というものである。これは学生の英語力のレベルに関わらず、である。この学生の声を耳にするまでは、NetAcademy以外にもeラーニングの授業で活用するすべての学習教材をネット上に置き、毎回行う小テストもネット上で実施・自動採点するという形式を導入していた。しかし、ここに「eラーニング」という科目名とは一見矛盾しているようにも思える「書く」という作業を敢えて積極的に取り入れることにした。

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

2.2. 筆写

英語を得意としない学生にとって、自分の力で一から書く英作文は非常に困難であり、学習意欲そのものを奪ってしまう可能性がある。そこでまず、学習教材の英文を書き写すという単純作業を導入してみることにした。筆写といっても、ただ無意識に手本を書き写すのでは学習効果を得られないため、内容を読み取る努力をしながら書き写すよう、繰り返し指示しながら作業をさせることにしている⁸⁾。また、学生のレベルに応じて、書くときに意識すべき項目も具体的に提示した。たとえば、比較的英語力の高い学生であれば、冠詞の使い方や慣用表現など、やや難易度の高い部分に着目させ、逆に基礎力が不足している学生であれば、主語と be 動詞の一致、動詞の時制といった基本的な部分に目を向けさせた。

筆写に利用したのは、NetAcademy の基礎英語コース、初中級コース、スタンダードコースのリーディング教材である。これらの教材はプリントアウトせず、学生が画面上の文章をノートに書き写するという形をとった。非常に長い文章で、学生の集中力が持続しない可能性があるユニットは、扱うのを避けるようにするか、もしくは、あらかじめ筆写する必要のない箇所を指示して、筆写語数を減らすなどの対応をした。筆写の時間は 10 分前後とし、可能な限り授業開始直後の時間を充てた。これは、授業開始後によく見受けられる「落ち着かない時間」も解消するのを意図してのことである。

筆写のスピードは、個々の学生のもつ語彙力によって大きく異なる。単語のスペルをよく理解できている学生は、画面を見てノートに書き写す際に何度も画面を見返す必要はないが、語彙力の低い学生は、一目するだけでは一語でさえも書き切ることができず、何度も画面を見ては、一文字一文字を書き写していることもある。しかし、「語彙力が高ければ高いほど、より速く正確に書き写すことができる」ことを強調すると、筆写のスピードが速い学生は、より一層スピードを上げようとし、スピードの遅い学生は、単語のスペルを目に焼き付ける努力をし、できる限り速く正確に書こうとする。結果、より幅広いレベルの学生の語彙力強化に繋がっているように思われる。

なお、英語の筆写の効果については、これまでにあまり多くの研究がなされていないが、宇田 (2008) や宇田・佐々木 (2008) では、英語コミュニケーション能力の育成方法の一つとして筆写を取り上げている。宇田 (2008) は、主に英語の筆写とライティング能力の関係を、宇田・佐々木 (2008) は、筆写とスピーキング能力の関係を考察したものである。前者では、筆写を宿題とし、提出回数の多い者とそうでない者とで筆記試験⁹⁾の結果を比較し、高得点を取ったものの多くが筆写の回数が多かったとしている。また、後者の研究でも同様に、筆写回数の多い者のほうが、スピーチテスト¹⁰⁾で高得点を取得したという結果を得ている。

ただし、授業中に「書く」という作業を取り入れることに好意的な反応を示す学生が多い一方で、授業で筆写を取り入れる際には、「なぜこのようなことをやらせるのか」と思う学

生がいるのも事実である。従って、筆写を取り入れるとどのような効果が期待できるのか、明確に学生に説明すべきである(寺島, 2007)。

2.3. 英作文

先に挙げた筆写では、「できる」→「嬉しい」→「もっとやりたい」という流れを作ることが比較的容易ではあるが、手本の文章を筆写するだけでは物足りない場合もある。しかし、一から書く英作文が難しくなると、学生の学習意欲を削いでしまいかねない。そのような時は、英文をある程度暗記し、暗記直後に即座にそれらの英文を書く、というリプロダクション活動を取り入れている。この活動に利用している教材は、NetAcademyの英文法コースである。英文法コースには、1セクションにつき15問前後の練習問題がついている。練習問題には、選択問題、穴埋め問題、並べ替え問題などが含まれる。しかし、教員の作成する小テストで高得点を取るためには、練習問題を画面上で解いただけでは不十分であった。その点を学生自身が満足していなかったため、練習問題の文を暗記して、ノートに覚えたものを書き出す、という作業を取り入れてみたのである。

学生には、英文の完全な丸暗記を強いるわけではない。練習問題を解きながら、どのような単語、表現、文法が使われているのかをよく解釈するように指示する程度である。練習問題を解き終わった学生は、練習問題の日本語訳だけが載っているプリントを見て、それを英語に訳すという作業を行う。練習問題を解く際に何も考えずに解いていた学生は、英作文の段階で手が止まり、苦勞をすることになる。そのため、この活動を繰り返すうちに、英作文の段階で苦勞せずにスラスラと文が書けるようになると、練習問題を解く段階で英文とじっくり向き合う学生が増えてくる。

英作文が終わった後は、再度NetAcademyにアクセスして学生自ら採点を行い、教員のチェックを受ける。教員は、採点に間違いがないかを確認すると同時に、間違えた箇所について、学生に理由を尋ねる。たいていの学生は、なぜ間違えたのかを詳しく語る。この活動を重ねていくと、学生は次第に自分の間違いやすいところや苦手な部分を認識し始め、「また時制を間違えました」、「簡単な単語もスペルを曖昧にしか覚えていないことがわかりました」などと、具体的なコメントを残すようになる。そして、次の英作文のときには同じ間違いを繰り返さないようにしようとする意識が芽生えるようになる。

こうした会話は、一人一人の苦手な項目を把握することができるという点で、教員側にとっても貴重なやりとりとなる。また、ある程度、英語力のある学生の中には、NetAcademyで使われている文とは異なる単語や表現を利用し、「この表現も合っていますか」と聞いてくるケースもある。そのような時に、学生の潜在能力を知ることができる。一方、学生の英語のレベルによっては、練習問題の量が多すぎて対応しきれないという場合もある。そのような時は、モチベーションを下げないように、NetAcademy上で問題を解いたときに間違えた

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

英文だけをピックアップして、ノートに筆写させるなどの対応をとっている。

2.4. 学習記録ノート

担当しているクラスの1つに、「英語 e ラーニング I」の再履修用のクラスがある。再履修のクラスでは、通常の授業にはない問題に直面する。それは、学年も英語のレベルも、在籍していた英語のクラスで学んできた内容も多様であり、また多いときには50名を超える大規模なクラスになるという問題である。

Krashen (1982, 1985) がインプット仮説として主張しているように、学習者が既存の言語能力 $i + 1$ の要素を学習することで次のステージ $i + 1$ に移行するのだとすると、教員はその $+1$ の要素を教えることが望ましい。しかし、このような多様なバックグラウンドを持つ学生に対して一斉授業だけを行えば、多くの学生の $i + 1$ を外れる可能性が高いのである。 $i + 1$ が達成されなければ学習者は満足せず、英語学習に対するモチベーションを下げってしまう恐れもある。そこで、授業中に「自習時間」を設け、その時間に教員が学生の個々の能力に応じた対応をすることとしている。

自習といってもまったく好きなことをさせるのではない。初回の授業で個人面談を行い、まず英語力を自己評価させ、次に学習したい内容（文法、語彙、TOEIC 対策、多読など）を問う。ただし、学習したい内容を具体的に聞きだすのは困難を極める。会話を始めると、「勉強したいことは特にない」、「何をしたらいいか、自分でもわからない」、「何でも良い」、

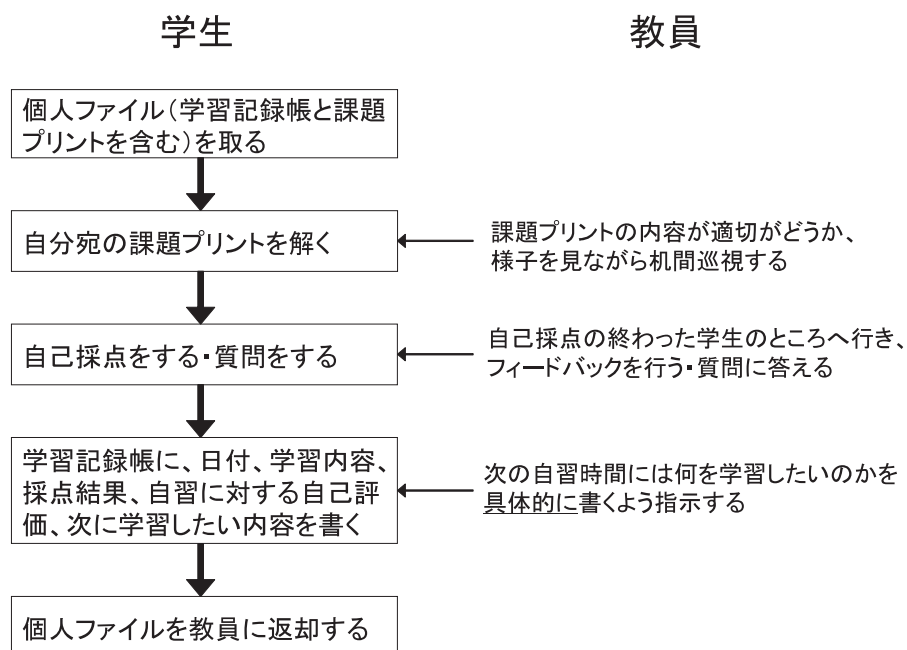


図4 授業内自習時間の流れ

といった曖昧な返事が返ってくることが多いのである。しかし、「今までやってきた中で出来なかったことや、これだけは出来るようになりたいと思うことは何かありませんか」と尋ねると、ほとんどの学生は少しずつ口を開き始める。そして、次の授業では、その「やりたいこと」に対応し、筆記活動を中心とした課題プリントや学習内容を個々に提示する。それに続く授業内での自習時間の流れは、図4に示すとおりである。

学生はまず、学習記録ノート（付録4）と呼んでいるものと、課題プリントを含む個人ファイルを受け取る。次に、ファイルの中に入っている自分用の課題プリントを解く。プリントの内容は、あらかじめ「自分が学習したい内容」として申告したものに沿っているため、学生は積極的な姿勢で取り組むことが多い。しかし、学習内容は適切でも、プリントの難易度が適切ではないことがある。そこで、机間巡視をしながら学生の表情を読み取り、特に手の動きが止まっている学生に対しては声をかけ、簡単に説明をしたりする。また、すぐに解き終わってしまった学生に対しては、学習記録ノートに「簡単すぎた」と書くように指示している。

学生は、プリントを解き終えた後に自己採点を行う。○×の印を書き込むだけでなく、間違えたところは正しい答えを書き写しながら、なぜ間違えたのかを考えるように指示している。教員は、自己採点の終わった学生のもとへ行き、プリントと一緒に見ながら、間違えた理由を学生に問う。たいていの学生は理由を説明することができるが、説明できない場合には解説をする。

解説を受け、質問をし終えた学生は学習記録ノートをつける。学習記録ノートには、日付、学習内容、採点の結果（正答率）、自習時間に対する自己評価を記し、次の自習時間で学習したい内容を書く。たとえば、現在完了形のプリントを解いたけれど、次の時間には過去完了形のプリントを解きたい場合は「過去完了形」と書き、もう少し現在完了形の学習を続けたい場合には、「そのまま」などと書く。このとき、「学習したい内容が曖昧に書かれていると、教員がプリントを用意できない」ことを強調するが、ここにはもう一つの狙いがある。それは、学生自身に自分の学習すべき内容を熟考させる、ということである。自分に足りないこと、自分にとって必要なことを認識するのは難しいが、これができるということは、Krashen (1982, 1985) の言葉を借りれば、「既存の言語能力 i 」を学習者自身が認識できているということである。 i を知れば、目標である $i+1$ のステージがより具体的に見え、モチベーションを上げることが容易になるのである。

学生の学習記録ノートへの書き込みは、徐々に具体性を増していく。初回の授業の個人面談では、「勉強したいことは特にない」と言っていた学生も、「○○はできるようになったから、次は～ができるようになりたい」、「○○を学習していたら、～がよく分かっていないことに気づいたので、次は～を学習したい」といった書き込みをするようになる。どうしても、具体的に書くことができない学生には、「今回のプリントで、○○ができていませんでしたが、

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

次に〇〇を勉強してみませんか」などと声をかけていくことで、どのように次の課題を見つけたら良いのかを示すようにしている。

なお、学習記録ノートの一部である、採点結果欄や自習の自己評価欄（A, B, C の 3 段階）についても、「今日は……点だったから、次回は～点を目指したい」、「眠くてプリントを解くときに集中できなかった。今度は集中して勉強できるように、家できちんと寝てこようと思う」などと、学生がモチベーションに関わるコメントを残すことがある。そのような時は、メンター¹¹⁾として対面で話をしたり、学習記録ノートに一筆返信を書いたりすることで、彼らのモチベーションを維持・向上させるようにしている。

2.5. まとめ

以上、「英語 e ラーニング I」の通常クラス、及び再履修クラスでの指導例を示した。新入生にとって、NetAcademy を利用したクリックやタイピングによる英語学習は新鮮であり、その新鮮さには英語学習に対するモチベーションを高める役割があると言える。しかし、手を使って文字を書く作業が減ることで、「PC を使った英語学習の効果」への懸念が次第に学生の間で広まっていくということ、また、それによって英語学習に対するモチベーションが失われていくという事実にも目を向ける必要がある。筆者は、解決案の一つとして、授業内の筆記活動をできる限り増やすことを挙げたが、今後は授業外での、つまり課題学習における筆記活動も学生に促したいと考えている。

再履修クラスの学生に対しては、人数の多さや学生の多様なバックグラウンドに対応したさまざまな指導法が考えられるが、学生全員のモチベーションを維持・向上するために、筆者は「学習記録ノート」と各学生に適した課題を用意する方法を導入していることを述べた。教員がメンターとしての役割を果たすことで、再履修の学生のモチベーションを上げることには成功はしているが、今後は英語の能力もより高めるような指導法を模索しながら、再履修クラスならではの問題に対応していきたい。(文責：三宅ひろ子)

3. 実践例 3：クイズ

3.1. はじめに

学生の英語力を上げるためには、授業中は当然のこと、授業外でも学生個人で英語学習の機会を積極的に持つ必要がある。そのために、大学における英語の授業において、学生が英語学習へのモチベーションを高く維持できるための方略を構築すべく試行錯誤してきた。

本学で授業を担当して 4 年目になるが、これまでに指導を経験してきた他の大学と比較して、このモチベーションアップのための指導方略がより重要であると思われる。本学で指導するにあたり、まず認めなければならない実態として、学生の多くが英語に対して苦手意識

を持っており、なかには英語に対する嫌悪感さえ抱いている者も少なくない¹²⁾。このような状況において、英語の技能を指導するだけの授業では、英語に対する苦手意識や嫌悪感を増大させてしまう可能性が高い。これを避けるため、この4年間は学生に英語学習へのモチベーションを喚起・維持・向上させるための方策を常に考えつつ授業に臨んできた。

その中で特に重視してきたのは、「英語の楽しさを教える」ということである。英語学習に対するモチベーションが低い学生にとっては、英語の勉強は苦痛でしかないかもしれない。しかし、工夫次第では英語を楽しく学べる方法はいくらでもあることを学生に伝えたかった。洋楽や映画などは学生が興味を持ちやすい学習媒体であり、また、日本のマンガの英語版も学生の反応がよい。1人で取り組むと退屈な学習も、ペアワークやグループワークで、適宜ゲーム的な競争形式にすることで、学生は相互に助け合い、楽しみながら課題に取り組むことができる。

中等教育と比べて、教材選定や指導法の自由度が高い大学での授業においては、教師の工夫次第で学生が英語を楽しく学べる方法を取り入れやすい。また、学生も英語を楽しく学べる手法を知れば、授業外でそれを実践し、結果として英語力を高めることも期待できる。「学ぶ楽しさ」を取り入れることは、英語学習意欲の低い学生への効果的なきっかけになりうると思われる。そこで、ここでは「英語の楽しさ」を「英語eラーニング」においてどのように指導しているのか、具体的に論じることとする。

3.2. 問題点とその解決法としてのクイズの導入

本学の指導方針として「英語の楽しさ」の指導を特に重視していると先に述べたが、実は「英語eラーニング」はこの方針に最も沿いにくい授業であった。本科目はALCのNetAcademyを主要教材として授業を展開することが大前提であり、技能としての英語訓練を強調した授業にせざるをえない。また、1クラスの人数が多く、コンピュータを使っていることもあって、学生とのインタラクションの機会が少なくなり、ラポールを築きづらい。さらに、リーディング、リスニング、語彙、文法、TOEIC対策など、指導すべき項目が非常に多く、各教員のオリジナリティーを生かした授業を展開する余裕がない印象を持たざるを得ない。筆者の授業も例外ではなく、英語学習を「楽しむ」ための教材を導入する機会を作ることが困難であった。

以上の理由から、「英語eラーニング」の通常授業で行う楽しめる教材は、短時間で行うことができ、それに加え積極的に学生が参加できるものでなければならぬという制約が生じ、「英語の楽しさを教えること」に合う授業を展開できないのが現状であった。「英語コミュニケーション」や「英語プレゼンテーション」の授業は少人数制、かつ週2回の対面授業であるため、学生との楽しい交流がしやすく、効果的な授業を運営できているように思われた。その分、eラーニングはうまくいかない面が多く、失敗の連続であった。本学での4年

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

間は、e ラーニングと格闘する日々だった、と言っても過言ではない。

毎回授業後に E メールでアンケートを実施し、学生のリクエストを出来る限り取り入れるように心がけた。その中で、「課題学習で NetAcademy を自習しても、分からない部分が多すぎて、小テストで合格点が取れない」という回答が多かったので、自習しやすくするために、小テストの詳細な解説プリントの配布や、自習補助ファイルの自作ホームページからのダウンロードなど、様々な方法を試してきた。ただし、彼らが NetAcademy に積極的に取り組むには、英語学習へのモチベーションが高いことが前提であり、これがないと課題学習の効果が上がらないという問題が大きな悩みであった。

そのような状況において、1つの光明を見いだせたのが、クイズであった。学生が英語学習を楽しめるような教材を、時間の許す限り取り入れてきたが、中でも学生の反応が一番よく、短時間で行えるものがクイズだった。このクイズの導入により、学生の英語学習に対するモチベーションは少なからず向上したように思われた。

形式としては、学生に問題を出し、分かったら答えを紙に書かせ、教卓まで持って来させ、合っている場合は○をつけるというものである。個人で参加するのが基本であったが、隣の席の学生とのペアで行う時もあった。授業の最初にウォーミングアップとして行うこともあれば、中ごろに息抜きとして、または授業時間の調整として最後に行うこともあった。

クイズの内容も、パクン英検、スプリングビー、ジョーク、英語トリビア、などいろいろなものを試してみた。その中で、特に学生の反応が良かったのはなぞなぞであった。以下に、授業で行った実践例を紹介する。

3.3. なぞなぞ

英語のなぞなぞは学生の反応が最も良く、学期末などに行うアンケート調査でも最も評判が良かった¹³⁾。その理由は、英語の得手、不得手よりも発想力が求められるからではないかと思われる。従って、本学の多くの学生に適した活動であると考えられる。

英語のなぞなぞは、インターネット上で容易に検索できる¹⁴⁾ので、学生の英語のレベルに応じた問題を選択し、授業で扱っている。授業内では、以下の順番で活動を行っている。

- ① 問題を教員が英語で2, 3回読み上げ、分かった学生から紙に書いて持って来させる。(問題文のディクテーションを行い、その後に考えさせることもある)
- ② ①の時点で解ける学生は少ないので、なぞなぞの英文をホワイトボードに板書する。
- ③ ②の時点で答えを持って来る学生が少ない場合は、問題文の意味を理解していない可能性が高いので、問題文の英語を解説する。
- ④ ときには③の時点でも、問題によっては答えを導きだせない時がある。その場合は、ヒントを出す(英語力ではなく発想力の問題で答えがひらめかないことも珍しくない)。

- ⑤ 最後にクラス全体に向けて答えを提示し、解説をする。

なぞなぞをモチベーションの強化につなげる際に重要なのは、学生自身で答えを導き出せるような問題を提示したり、答えにたどり着くまでに適度なヒントを与えたりすることである。分からない問題が続くと、学生は次第にやる気を失ってしまうからである。そこで、教員は授業前の準備のみならず、問題を前にした学生の表情等から状況を判断し、臨機応変に対応することが不可欠となる。

以下、筆者がこれまでに実際に授業で出題したなぞなぞの中からいくつか紹介したい。なぞなぞにはいろいろな種類があり、それと関係づけながら説明する。

例 1. This is green and black. Inside it's red. And babies are all blacks. What is it?

→ A watermelon.

これは、意味から答えを導くなぞなぞなので、日本語で出題しても通用するものである。解答のポイントは、babies が「種」を表していることに気づくかどうかにある。ヒントとしては、「色に注目すること」が有効だが、それでも答えにたどり着かない場合は「食べ物」と具体的なヒントを与えることもあった。同様のなぞなぞには、“What has four legs and a back but no body?” (→ A chair.) というものもある。

例 2. What dog can you eat?

→ A hot dog.

これは、駄洒落を活用したなぞなぞである (dog が hot dog の中に隠れている)。このなぞなぞはかなり簡単な問題なので、多くの学生はヒントがなくても答えることができる。そこで、応用問題として同種類のなぞなぞ、“What pet is always found on the floor?” (→ A carpet.) などを出すことも可能である。

例 3. What animal is always at a baseball game?

→ A bat.

これは、スペルが同じで2つの異なる意味を持つ単語であることが理解できるかどうかのポイントになるなぞなぞである。bat の持つ「野球のバット」と「コウモリ」という2つの意味がうまく使われている。「野球用品を考えてごらん。その中に、動物の名前にもなるものがあるから」というヒントも効果的だが、それで答えが出ない場合は「有名なアメリカの漫

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

画の主人公で、最後に man がつくもの」などと加えると、多くの学生は答えることができる。“What do both boxers and women usually love?” (→ A ring.) といったなぞなぞも同種類にあたる。

例 4. What kind of flower grows on your face?

→ Tulips.

これは、発音に関するなぞなぞである。「くちびる」は2つあるので two lips であり、似た発音になる tulips が答えになる。学生は日本語式で考え、nose と答えることが多い。しかし、日本語であれば「花」と「鼻」で通用するが、英語では全く意味をなさない。英語と日本語の違いを意識するためにも、効果的ななぞなぞである。ヒントとしては、「有名な花の名前の中に顔の一部がある」や、「顔の下の方にある部分を英語にして、そこから花を想像する」が有効であった。同様のものには、“What starts with T, ends with T, and is full of T?” (→ A teapot.) などがある。

他にも様々ななぞなぞがあるが、授業ではヒントがあれば解けるレベル、かつ音声のみでも聞き取れるなぞなぞを活用している。学生は苦勞しながらも、答えが分かると笑顔で答えを見せにくる。筆者自身も子供の頃、このようななぞなぞをよく友人と出し合い、楽しみながら母語である日本語を学んだ。「大学生には子供じみている」と思う人もいるかもしれないが、実際には、ほとんどの学生は楽しんで取り組んでいる。

3.4. なぞなぞの学習効果

なぞなぞはモチベーションアップに貢献するのみならず、英語力の向上にも効果的である。まず、身近なものの英語での言い方を学ぶことができる。前述の例1のなぞなぞでは、‘Suika’ と答える学生が少なくない。高校までの英語教育と大学受験の英語学習においては、ニュースや論説文などの堅い文章の理解を重視する傾向があるので、逆に身近なものの名前を学ぶ機会が十分に与えられているとは言えない。極端な場合には、「入試には（身近な単語は）出ないし、仮に出題されても注で説明されるから、覚える必要はない」と指導する教員までもいるようだ。そのような考え方もあるが、長期的な視野に立つと大きな問題が見えてくる。一言で表せば、身の回りのものの言い方を知らなければ基本的な会話もできないということである。

なぞなぞは元来子供が楽しむものであるため、簡単で使用頻度の高い単語が多い。身の回りのものの名前を覚えるのに適していると言える。日本語であれば言えるが英語では表現しづらいなぞなぞを選ぶと、さらに高い学習効果が期待できる。

次は、英語の音声への興味を引き出すことができることである。例4のなぞなぞでは、

'Churipu'のように日本語式の発音を綴る学生が続出する。授業では「スペルミスでも正解にするから、積極的に答えを持って来てください」と指示していることは確かである。しかし、当然ながら正しいスペルで書けるほうが望ましい。なにより問題なのは、tulipを日本語式の発音として覚えていることである。発音やアクセントを気にしすぎて英語を口から出せないよりも、音声は気にせず、内容を重視して積極的に話すことを促したほうが、スピーキング力の向上のためには良い。しかし、正しい音声で話せることも望ましく、発音を理解できるか否かが英語を聞き取る際にもポイントになる。

「オーラル・コミュニケーション」の開始や、大学入試センター試験におけるリスニングの採用など、中等教育においては以前よりは音声重視にはなってきたが、その成果は十分とは言い難く、その結果少なくとも筆者の接する学生には音声面に弱点がある人が多い。鳥飼(2002)も主にTOEFLとTOEICの分析を元に、「『実践的コミュニケーション能力』育成に大きく指導方針が転換し、限られた時間内に聞くこと、話すことの指導に重点が置かれたのであるから、結果として『読む力』は相対的に弱くなったことは理解できるとしても、それを補うだけの『リスニング力』が高まっているわけではないのはなぜなのか」(p. 107)と英語教育の問題を指摘しているが、これは文字英語の理解力が重視される大学受験の現状¹⁵⁾を考えると、仕方ないのかもしれない。その不備を補う意味でも、大学では音声を重視した教育を行うべきである。また、本学は「英語コミュニケーション」という音声面を重視した必修科目があるのだから、その土台となる音声強化は必要不可欠である。

一般に年齢が上がるにつれ、外国語の音声習得は困難になると言われていることから考えても、大学生に音声面に注意を向けさせることは、非常に大切なことだと思われる。東後(1998)は「10歳を過ぎたころからは、それまで頭に入った言語(たいていの場合は母国語)が他の言語の侵入を阻止し始める。そのために、中学から高校と進むにつれて、だんだんと発音の習得ができなくなり、大学に入った時には手遅れに近い状態になる」(p. 84)と述べており、音声習得が困難なのは確かだ。しかし、手遅れだと諦めれば発展性が見込めないのも、大学入学後が最後の機会と考えて指導することが、学生のモチベーションの喚起につながると考えられる。

しかし、だからと言って音声学ばかりを扱うような授業をしたり、徹底的な発音矯正を行ったりするのは、英語に対する苦手意識を高めることにもつながりかねない。また、「英語コミュニケーション」の授業ならば可能かもしれないが、「英語eラーニング」では学生の人数や授業時間を考えても、入念な発音指導を提供することは困難である。そこで、発音がポイントになるなぞなぞを導入することにより、自然な形で英語の発音への興味を喚起してはどうかと考える。

最後に、なぞなぞを使った活動は特に疑問文の習得に効果があることを強調したい。いかなる言語でも共通することであるが、質疑応答は他者との会話における基本である。したが

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

って、疑問文は会話の土台となる重要な学習項目である。疑問文の形式の多くは中学で習う項目なので、英語が苦手な学生でも少なくとも英文の意味は理解できる。しかし、だからといって実際の発話の段階で正しく表現できるとは限らない。事実、「英語 e ラーニング」で文法を教える時には、「英語コミュニケーション」や「英語プレゼンテーション」との連携も意図して英作文を適宜取り入れているが、小テストの解答などから判断する限り、既習の疑問文の形式を正しく書ける学生は多くない。

なぞなぞは、そのほとんどが疑問文によるものであり、疑問文の学習の導入に適している。疑問文をなぞなぞと関連づけて説明すれば、学生は疑問文をより身近に感じるようになるはずである。さらに、多少難易度は増すが、学生自身がなぞなぞの疑問文を作り、互いに出題しあうことで、楽しく疑問文の発信の練習をすることもできる。

以上の3つの理由により、なぞなぞを授業で導入することは、英語力の向上のために高い効果が期待できる。「英語力を伸ばすこと」はモチベーションアップの最も重要な要素であることは間違いない。「楽しく」学べ、さらに英語力も高めることのできるなぞなぞは、「英語 e ラーニング」のような基礎力養成を目的とする科目においては有効な手法だと思われる。

3.5. クイズの欠点と今後の改善点

ここまで、なぞなぞを「英語 e ラーニング」に導入することの利点を述べてきた。学生の反応やアンケートを見ても、その他のクイズも英語学習に対するモチベーションを高めるきっかけとして役立っていることは間違いないように思われる。

ただし、なぞなぞなどのクイズを行えば、3.2. で指摘した問題点が簡単に解消するものではない。他の学習方法ともうまく兼ね合わせて、総合的な視野に立った授業をしなければならない。そこで最後に、クイズの欠点と今後の改善点について述べたい。

まず重要なのは、活動の結果を個人評価とどのように関連づけるかである。クイズは当たれば嬉しく、外れれば悔しいので、成績評価と関係なく行っても、一定以上の効果はあるはずである。ただし、成績評価に加味しないとなると、中には真剣に取り組まない学生もでてくる危険性がある。答えを思いついた学生が各自で前に答えを見せにくる形式を取れば、学生が積極的に答えを見せにこないと盛り上がり欠ける可能性もある。そこで授業では、獲得得点の高かった学生に若干のボーナス点を加えることにしている。

ただし、この方式だと、点数を目当てにした「外発的動機づけ」¹⁶⁾による活動となってしまう、筆者が目指す学生の「内発的な動機づけ」¹⁷⁾を高める活動とすることが難しくなってしまう。とはいえ、最初から内発的動機を期待するのは難しいため、まずボーナス点を得るという外発的動機づけから活動を始め、次第に活動自体への興味・関心を深め、内発的動機づけによる学習に移行させることを目指した。しかしながら、この手法で活動を開始すると、学生がボーナス点を取るために嫌々ながらも参加するという状況につながることもある。こ

れでは報酬が逆に意欲を弱めるアンダーマイニング効果を引き起こす危険性がありうる¹⁸⁾。さらに、クイズには得意不得意があるので、得意な学生だけがボーナス点を稼ぎ、苦手な学生が疎外感を感じてしまうことにもなりかねない。

これらの問題点を解消するために、様々な種類のクイズを導入することで、できるだけ得意不得意にばらつきがないように心がけてはいる。しかし、クイズをどのように評価につなげるかは、今後の課題の1つである。

次に重要なのは、授業計画の全体の中でクイズをどのような位置づけにするかである。3.2.でも述べたように、「英語 e ラーニング」はやるべきことが多く、クイズを取り入れている時間を見つけにくい。本来は、なぞなぞ以外にもいろいろなクイズがあるが、活動に時間がかかるものが多く、短時間でできるものとなると限られてしまう。

また、クイズは学生が積極的に取り組むのは確かだが、NetAcademy を中心とした技能訓練の色彩の強い学習とのギャップは大きく、ウォーミングアップのクイズによって学生の積極性を引き出せたとしても、その後の活動につながるとは限らない。筆者の授業では、極端な場合には、クイズの時間に力を使い果たし、その後の授業に集中できないという学生も見受けられた。

願わくは、クイズはクラスの雰囲気盛り上げるためのきっかけに留め、クイズによって上げることができたモチベーションを維持できるよう、その後の授業を行っていきたいが、クイズ活動とその後の授業活動との関連づけの問題も、解決すべき課題である。

最後に挙げられる大事な点は、クイズをどのように発展させるかである。これは前述のクイズの位置づけにも関係することだが、クイズが授業全体とつながっていないとその効果が下がってしまう。「英語 e ラーニング」は本来、英語の基礎力を増強することを授業の目的としている。その土台となるのは語彙力と文法力、そして、その2つの力を土台にしたリーディングとリスニングであり、これらと連動させることを検討しなければならない。なぞなぞは疑問文の作り方などの文法力アップにつながるが、メイン教材である NetAcademy とどのようにつなげていくかが難しく、なぞなぞ以外のクイズは NetAcademy との連動がさらに難しかった。

現時点で著者が試しているのは、PC 環境が整った教室であることを活かして、クイズ活動をインターネットと上手く連動させることである。なぞなぞはインターネットで数多く見つかるので、課題学習の1つとして取り入れたことがある。それは、インターネットで面白いなぞなぞを探し、Eメールで報告させるというものであった。その中から面白いものを選んで、次の授業で出題した。そうすると、探している時に見たものと重なる場合があり、もちろん授業で○がもらえるので、学生はインターネットで英語を学習することの意味を実感できるようだ。

ただし、なぞなぞ以外のクイズも含めインターネットと上手く関連させる方策が見つかり

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

つつある一方で、肝心の NetAcademy への連動方法については未だ模索中である。これが、今後解決すべき大きな課題だと考えている。(文責：小宮山貴教)

4. 実践例 4：Moodle と NetAcademy の連関

4.1. はじめに

I.3.2 で述べられたように、NetAcademy を利用した「英語 e ラーニング」の授業には多くの利点もあるが、欠点を補うために教師側が補わねばならない点も存在する。上記 3 つの実践例も、文法解説、筆記活動、クイズ等を通じて NetAcademy が提供する教材、学習活動を補完し、動機づけを高めるための実践例である。本実践例では、世界中で広く使用されている LMS (Learning Management System) である Moodle を用いて、NetAcademy をより効果的に学習することで学習動機づけを高める試みを報告する。Moodle は、簡単にいうとインターネット上で授業用のウェブページを作成し、教材配布やクイズ等を行うためのソフトである。いわゆるオープンソースソフトであり、利用者は自由に、また無料でソフトを入手し利用することができる (Rice, 2008)。2009 年度、Moodle を利用している e ラーニングクラスは 33 クラス、利用教員は専任、特任、非常勤を含めて 11 名、教員を含める登録

e-learning I a/b (1E): Thr.2nd: Tsushima

TKMS ▶ EL1Eab TH2 TT

People
Participants

Activities
Assignments
Forums
Quizzes
Resources

Search Forums
Go
Advanced search ?

Administration
Turn editing on
Settings
Assign roles

Weekly outline

- News forum
- How to upload a picture file.

22 October - 28 October

- Reading Practice Sheet (7.2)
- Reading Practice Sheet (7.2) Homework
- Classwork (October 22)
- Grammar Quiz (Initial): Unit309-312
- Grammar Practice Sheet U309-312
- Grammar Quiz (Review): Unit309-312
- Grammar Practice Sheet U309-312
- Reading Practice Sheet (7.2) Classwork

図 5 Moodle 上のクラスページの一例

者は約 1000 名となっている。各教員は各授業に対応したウェブページ（以降、「クラスページ」と呼ぶ）を作成，編集することができ，各学生は各自が受講している授業のクラスページのみを利用できるようになっている。図 5 がクラスページの一例である。画面中央，22 October — 28 October が，当該授業がある週の日付を示しており，その下に縦に並んでいるリストが教材，教材提出場所，クイズ等である（以降「教材・活動リスト」と呼ぶ）。

4.2. Moodle を利用した授業活動の実例

以下に図 5 の例を用いながら，e ラーニング授業において Moodle を利用する主な利点を簡単に述べる。その後，NetAcademy の英文法ユニットと Moodle を連関させた実践例について詳述する。

4.2.1. 授業内容・課題のアナウンス

「英語 e ラーニング」では課題学習が必須となっており，授業を欠席した学生が課題学習の内容を確認することが非常に重要である。Moodle ではテキストページ作成という機能により，当該週の授業の内容やその週に出された課題・宿題を記しておくことができる。例えば，図 5，教材・活動リストの“Classwork (October 22)” がそれにあたる。授業を欠席した学生はこのテキストページを授業後に閲覧することで NetAcademy のどのユニットが当該週の課題であるかを確認できる。また，筆者は授業の始めと最後に学生にこの内容を提示し，その授業の内容の確認と宿題の確認に利用している。

4.2.2. 課題の配布と提出

上記の実践例でも提起されているように，NetAcademy を用いた e ラーニング授業では，NetAcademy 上にある練習問題を何らかの形で補完するプリント教材等を使用することで学習動機づけを高めることが求められている。Moodle では，課題を行うために必要なファイルをクラスページ上に配置しておくことができ，学生は授業内外でそのファイルをダウンロードすることができる。図 5，教材・活動リストの 1 番上と上から 5 番目にあるワードファイルのアイコンが教材ファイルである。さらに課題終了後には課題を指定場所にアップロードすることができる。さらに教員は提出された課題に対する採点，点数の記入，コメントをすることも可能である。最後に学生は，課題に対する点数とコメントを閲覧することができるようになっている。

4.2.3. Moodle のクイズ機能

NetAcademy を用いた e ラーニング授業においては，クイズを用いて学習動機づけを高めることも有効な手段の 1 つである。Moodle では，用途に合わせたクイズの作成，実施ができ，さらに自動採点を行うことができる。クイズの種類には，4 択，穴埋め，エッセー等があり，クイズが実施可能な日時，点数配分，部分点の設定等，非常にきめ細かい設定が可能である。さらに，学生がクイズをいつでも受けられるよう設定できるため，授業中のみならず授業外

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

の課題としてクイズを利用することも可能である。

4.3. 実践例

筆者の授業では、課題とする NetAcademy の英文法ユニットと、Moodle のプリント配布機能・クイズ機能を連関させる試みをしている。図5の例で挙げられている授業では、英文法コース4ユニットを授業外で行う課題とし、学生は前週授業から1週間の間に課題ユニットを大学、また自宅で学習することとなっている。

4.3.1. Initial Quiz

授業開始後すぐに課題に関連するクイズを行う（以降，“Initial Quiz”と呼ぶ）。このクイズは、学生が課題のユニットの学習内容をどの程度学習し理解したかを評価するものである。学生は、教材・活動リストの Grammar Quiz (Initial): Unit309-312” をクリックし、クイズを開始する。クイズは“Short Answer”という種類で、書き換え穴埋め問題や並べ替え問題などの12問で構成され、制限時間は8分である。例えば、ユニット309では助動詞“would”を使った様々な表現がトピックとなっており、下記が問題の一例である。学生は、1つの空欄に解答をタイプして入力する。この問題では、“rather stay here than”が正解となる。

I want to stay here instead of going out.

=I would _____ go out.

Moodle におけるクイズ機能の特徴の1つに、クイズの後に正解を表示するかしないかを選択できる機能がある。Initial Quiz は学習達成度を試すクイズであるので正解を提示せず、点数のみを提示している。

4.3.2. 英文法練習問題プリント

2009 年度前期の学生アンケートでは、「NetAcademy を課題学習として自分でやり、それに対する英文法のクイズを解くだけではなかなか重要なポイントが理解できない。」、という意見が多かった。そこで後期より英文法練習問題のプリントを利用することとした。プリントでは、学習対象であるユニットの文法ポイントに関する書き換えや穴埋め問題を用いている。

Initial Quiz が終わり点数を確認した後、教材・活動リストの“Grammar Practice Sheet U309-312”（下から4番目）をデスクトップ、また各自の USB メモリーに保存し、ファイルを開く。教員の指導のもとプリント問題を解きながら回答・解答を書き込み、同時にペアワーク等による口頭練習をする。練習が終わったら、書き込んだ正答が入ったワードファイルを提出場所（教材・活動リストの“Grammar Practice Sheet U309-312”（下から2番目））にアップロードする。学生は、その後いつでも正答が入ったファイルをダウンロードして自宅コンピュータに保存、印刷し、復習することが可能である。

4.3.3. Review Quiz

練習問題プリントが終わった後、もう一度その範囲の復習テストを行う。学生にとってこ

れは、練習問題プリントで新しく理解が深まった部分を試す機会となり、また課題学習をやらずに Initial Quiz で低得点を取った学生にとっては、それを取り戻す機会となる。問題形式は Initial Quiz と同じで、書き換え穴埋め問題や並べ替え問題が 12 問、時間制限 8 分である。問題 12 問のうち 4 問が Initial Quiz と同じ問題、8 問が異なる問題となっている。

Moodle クイズの重要なもう 1 つの機能に、“Adaptive mode”がある。このモードでは、解答を記入後それが正解であるかどうかを、“Submit”というボタンを押すことによって確認することができる。解答が正解だった場合は解答欄の右側に緑色のチェックマークが表示され、不正解だった場合は赤色のバツマークが表示される。また部分点が設定されている場合はオレンジ色のチェックマークが表示される。正解でなかった場合には、解答を修正して入力することができるが、修正をした場合は 1 回につき 1 点満点で 0.1 点の減点がある（減点の点数は設定可能）。Adaptive mode を使うと、学生は理解が完全でない問題に対して様々な正解の可能性を試すことができ、それによってより深い理解を得られているようだ。さらに、クイズに対してより積極的に取り組む姿勢も見受けられる。従って、Initial Quiz のように学習達成度評価のみを目的とせず、Review Quiz のように問題練習するという要素を加味したい場合、この Adaptive mode を使用することを推奨する。

Review Quiz が Initial Quiz と異なるもう 1 点は、クイズが終了した後、クイズの点数、及び解答を画面に表示する点である。その画面には、解答、得点とともに学生が入力した解答や、修正があった場合は修正された解答全てが表示される。学生には、特に正解できなかった問題の解答を確認し、理解できなければ質問するよう指導している。

4.3.4. Question Bank

Moodle にはクイズ問題を教員間で共有できる機能があり、作成した問題をまとめて保存する場所が設定されている（“Question Bank”）。2009 年度、本稿執筆者である三宅、対馬が英文法コース 3 レベルの教材内容に対応するクイズ問題集を作成した。各レベル 48 ユニット、各ユニットに 5 問、計 720 問の問題が登録してある。教員は、クイズ作成画面で Question Bank の中から必要な問題を選択することで、課題ユニットに対応したクイズを作成することができる。図 5 の例ではユニット 309 から 312 の 4 ユニートを課題範囲としているが、Initial Quiz と Review Quiz のそれぞれに、各ユニットにある 5 問の問題から 3 問ずつを選び、計 12 問のクイズを作成している¹⁹⁾。

4.4. まとめ

本稿では、e ラーニング授業において Moodle を利用する利点の中から、授業内容・課題のアナウンス、課題の配布と提出、またクイズを行う機能について取り上げた。さらに実践例として、NetAcademy の英文法ユニットと、Moodle のプリント配布機能・クイズ機能を関連させる試みを報告した。Moodle には e ラーニング授業の利点であるいくつかの機能が

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

集約されている。第1に、時間と場所を問わずに様々な学習活動ができる機能、第2に、上述 Question Bank の例で示される情報共有機能、第3に、クイズの自動採点、成績管理機能を含む情報管理機能である。これらの機能を NetAcademy が提供する豊富な学習活動と組み合わせることで、より効果的で、学習動機づけが高まる授業につながると確信している。(文責：対馬輝昭)

III. おわりに

本稿の目的は、新カリキュラム施行後の4年間を、主要必修英語科目である「英語 e ラーニング」に焦点を当てて総括し、具体的な実践例を示しつつ成果と課題を明らかにすることにあつた。他の必修科目である「英語コミュニケーション I」、「英語プレゼンテーション I」については、担当する専任教員、及び特任講師を中心に既に成果検証が行われているが、本科目についてはこれまで実施・運営に手間がかかることが多く、総合的な視点で考える機会を持つことができなかった。その意味で、本稿執筆を通して、専任教員と特任講師が共に本科目の成果と課題を共有できたことは意義深い。

「英語 e ラーニング」を本学のような規模の大きい大学の英語プログラムで必修科目として取り入れたことは、当時としては全国的に見ても画期的なことであつた。導入を決断し、学外調査・及び学内の合意に向けて邁進した当時の担当教職員の本学英語教育の発展に対する強い意気込みを感じた。そして、先人達の努力を何とか伝承すべく、全教員で協力しつつ今日まで努力してきた。

本稿にもあるように、本科目は未だ様々な問題点を抱えている。しかし、前向きに捉えるべきであると筆者は考える。つまり、担当が皆真剣に教育活動に取り組み、積極的に意見交換を重ねているからこそ、問題が明確になってきたと思うのである。本学のように必修科目を教員間で支えながら運営し困難点にも果敢に立ち向かっている例は全国的にさほど多くないであろう。正に先進的な取り組みを推進しているということを強調したい。

今後、本科目を始め3学部英語プログラムの教育実践をさらに充実させると同時に、客観的な検証も積極的に行っていくことが必要となる。そして、本プログラムを日本の英語教育のモデルとなるような先進的なものに発展させたい。そのために、大学執行部、全学共通教育センター、非常勤講師を含む英語教員、そして本学学生が一丸となって本プログラムをサポートすることが重要となることを指摘して本稿の結びとする。(文責：関昭典)

注)

- 1) 本稿を、故野村啓治先生、ご退官された寺地五一先生に捧げます。野村啓治先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

- 2) 2007年度、つまり本プログラム開始元年以前の経過については、一部、過去の資料（たとえば、寺地・野村、2006など）や、既に本学を退官された教員への聞き取り調査に基づくものであることをあらかじめ述べておく。
- 3) 英語学習アドバイザー資格認定制度。適切・的確な英語アドバイスと学習者に応じたカウンセリング・メンタリングができる、プロの英語学習アドバイザーを養成・認定することを目的とした資格制度。資格は、英語力およびアドバイス力などにより、ジュニアからマスターまでの4段階で認定される。ESACの詳細については次を参照のこと。
http://www.alc.co.jp/event/esac/esac_2_080620.pdfを参照のこと。
- 4) 2007年度の「英語eラーニング」に関する学生アンケート調査の結果については、付録2を参照のこと。
- 5) 授業用Webページを作るためのオープンソースソフトのこと。
- 6) Dörnyei, Z. 2001. を参照のこと。
- 7) これは2008年度の状態であり、2009年度からは静止画像が配信できるよう改善された。
- 8) 場合によっては、音読筆写を取り入れることもある。
- 9) 15分間で「アメリカ社会を自由に論ぜよ」という課題に答えるもの。
- 10) “What do you want to study in this course?”という質問に対して、好きな長さで英語スピーチをしてもらい、発話の長さを5秒単位で測定し、英語の正確さと流暢さをA・B・C・Dの4段階で評価したもの（宇田・佐々木2008：p. 3）。
- 11) mentor（学習支援者）のこと。
- 12) Seki & La Greca. 2009. (p. 51) には、「約29%の学生が英語が好きではないとアンケートに回答している」との報告がある。初回の授業で学生に、「英語が苦手な人」と問いかけると7割以上の学生が、「英語が嫌いな人」と問いかけると3割前後の学生が手を上げるクラスが多いので、これらの数値は本学の現状を表していると思われる。
- 13) 筆者が2007年度から2009年度にかけて担当したクラスでは、学期末に行ったアンケートの「通常授業で一番楽しかった活動があれば書いてください」という項目で、1番多かったのはなぞなぞ、2番目が洋楽の聞き取り大会、3番目がペアで物語を作る活動であった。
- 14) <http://www.brain teaser-world.com/>, <http://homepage.mac.com/mythbook/riddlemania/> を参照のこと。
- 15) 大学入試センター試験でも、リーディングの200点に対し、リスニングの配点は50点にすぎない。
- 16) 「報酬や罰を与えたり、競争させたりというように、他者からの働きかけ」（古川、2002：pp. 83-84）による動機づけなので、大学では評価や単位のために嫌々英語を学習することにつながりかねない。
- 17) 「何かに対する興味を満足させるため、もしくは達成感を得るために、自己目的的に行動をしている状態」（上淵、2004：p. 30）なので、学生が積極的に英語学習に取り組むことにつながりうる。
- 18) アンダーマイニングは「報酬のみならず、監視状況、期限の設定、評価教示のような外的拘束によっても同様の現象が見られる」（森・秋田、2006：p. 32）ようなので、ボーナス点を与えることは逆効果になる危険性はもはらんでいる。
- 19) 選択する問題数は教員によって異なる。

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

参考文献

- 上淵寿編著. 2004. 『動機づけ研究の最前線』北大路書房.
- 宇田和子. 2008. 「英語運用能力向上のために：産学共同研究の結果から (How to Improve English Proficiency : Proposals Based on a Joint Research)」『埼玉大学紀要』Vol. 57, No. 2: pp. 47-55.
- 宇田和子・佐々木良介. 2008. 「英語コミュニケーション能力育成方法 (To Develop English Communication Ability)」『埼玉大学地域オープンイノベーションセンター紀要』1: pp. 2-6.
- 小田登志子・土屋園子. 2009. 「英語科目におけるオブザーベーションウィーク (相互授業参観) の試み」『東京経済大学人文自然科学論集』No. 127: pp. 41-57.
- 関昭典. 2009. 「東京経済大学 3 学部英語プログラムに関する考察：発展英語教育の更なる進化を目指して」『東京経済大学人文自然科学論集』No. 129. 近刊.
- 関昭典・阿部真由美. 2008. 「学生の自律的英語学習支援—教師と学習アドバイザーの連携の重要性—」ALC NetAcademy ワークショップ口頭発表 (於福岡).
- 関昭典・ジェイソン・ラ・グレカ (企画). 2008. 『ALC NetAcademy ワークブック 基礎英語コースリーディング編』アルク.
- 寺島隆吉. 2007. 「英語教育の水源地を求めて—逆転発想の英語教育」『岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学』Vol. 56, No. 1: pp. 141-152.
- 寺地五一・関昭典. 2007. 「2007 年度英語 e ラーニング Ia & b, 学生アンケート調査結果」2007 年度第 2 回東京経済大学 3 学部英語プログラム FD ミーティング資料.
- 寺地五一・野村啓治. 2006. 「東京経済大学 2006 年度英語新カリキュラム グローバル化時代と大学ユニバーサル化への対応」ALC NetAcademy ワークショップ口頭発表 アルク教育社.
- 東京経済大学語学教育検討委員会. 2005. 「グローバル化時代に対応する新しい語学教育のあり方について—語学教育検討委員会答申—」.
- 東後勝明. 1998. 『子どもの英語いま, こんなふう』BL 出版.
- 鳥飼玖美子. 2002. 『TOEFL テスト TOEIC テストと日本人の英語力 資格主義から実力主義へ』講談社現代新書 1605. 講談社.
- 藤田玲子・山形亜子・竹中肇子. 2009. 「学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有効性」『東京経済大学人文自然科学論集』No. 128: pp. 35-54.
- 古川聡編著. 2000. 『教職に生かす教育心理』福村出版.
- 松田岳志・原田満里子. 2007. 『e ラーニングのためのメンタリング 学習支援の実践』東京：東京電機大学出版局.
- 森敏昭・秋田喜代美編. 2006. 『教育心理学キーワード』有斐閣.
- 文部科学省中央教育審議会. 2008. 『学士課程教育の構築に向けて』.
- Dörnyei, Z. 2001. *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press, 34.
- Krashen, S. 1982. *Principles and practice in second language acquisition*. Pergamon Press.
- Krashen, S. 1985. *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. Torrance, CA: Laredo Publishing Company, Inc.
- McCarthy, B. 2004. Does Online Machine Translation Spell the End of Take-Home Translation Assignments? *CALL-EJ Online*. Vol. 6, No. 1.
<http://www.tell.is.ritsumei.ac.jp/callejonline/journal/6-1/mccarthy.html>

- Rice, W. H. I. 2008. *Moodle 1.9 E-learning Course Development: A Complete Guide to Successful Learning Using Moodle 1.9*: Packt Publishing.
- Seki, A., & La Greca, J. 2009. Motivational and Attitudinal Factors Influencing English Study of Japanese Tertiary Level Students. 『東京経済大学コミュニケーション科学』 No. 31: pp. 47-66.
- Warschauer, M., Shetzer, H. and Meloni, C. 2000. *Internet for English Teaching*. VA: TESOL.

付録 1：2008 年度「英語 e ラーニング Ia」授業ガイド

I. 科目の目的

「英語 e ラーニング I」は 2006 年度より導入された新カリキュラムにおいて、英語の基礎力の補強・充実のための科目として位置づけられています。さらに TOEIC 受験への意識づけも行います。

(1) 基礎力の補強・充実

基礎力とは何かについてはより綿密な定義が必要だと思いますが、本科目においては英語構造理解力（英文法の知識と応用力）と語彙力に重点を置きたいと思えます。従いまして、NetAcademy 2 のコース・ユニットの学習と英文法の学習および語彙力アップを連動するように授業をご計画いただければと思います。

英文法の学習には、各コースの文法レファレンスと英文法コースを活用ください。語彙力アップには NetAcademy 2 の新機能「単語道場」（アルク SVL, Standard Vocabulary List12000 語と各ユニットの単語についてのテスト）が利用できます。

(2) TOEIC 受験への意識づけと受験準備

学生は 7 月に TOEIC もしくは TOEIC bridge を受験することになっています。そこで、授業内で TOEIC 受験への意識づけ（TOEIC とは何か、日本社会における TOEIC の定着度、なぜ TOEIC 受験を必修化しているのか等）をお願いします。受験準備として、Novice Level については、NetAcademy 基礎英語 コースの TOEIC Bridge 演習を、Intermediate/Advanced Level については、NetAcademy 初級中級コースとその TOEIC 演習を活用してください。さらに、TOEIC/TOEIC Bridge 受験のストラテジー（問題形式ごとの解法のポイント、時間配分、選択肢を先に読むなど）についても、可能な範囲でご指導ください。

なお、授業における TOEIC 受験準備の時間配分は、各先生の授業方針・計画に従ってお決めください。

(3) 科目の構成と段階履修

「英語 e ラーニング Ia」（1 期）、「英語 e ラーニング Ib」（2 期）は、それぞれ教員が指導する通常授業と学生が自律的に学習する課題学習によって構成されます。通常授業と課題学習を合わせて各 2 単位が認定され、通常授業と課題学習と切り離して単位認定はいたしません。

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

ん。課題学習の学習（出席等）が不十分な場合は、科目自体の単位が認定されない場合がありますので、学生にその旨周知ください。また、英語 e ラーニング Ia]、「英語 e ラーニング Ib」は段階履修となっていますので、1 期に「英語 e ラーニング Ia」の単位が未修得の場合は、2 期に再履修となり、「英語 e ラーニング Ib」は 2 年次で履修することになります。

II. 使用教材と授業の内容

2008 年度の 1 期は、主教材を以下のようにしたいと思います。

クラスのレベル	使用教材		
	主教材	TOEIC 受験準備	英語構造理解
Advanced Level	スタンダードコース	初級・中級コース	英文法コース
Intermediate Level	基礎英語コース (高難度ユニット)	初級・中級コース	英文法コース
Novice Level	基礎英語コース (低難度ユニット)	基礎英語コース	英文法コース

なお、NetAcademy 2 の学習パターンは単純明快ですが、マンネリ化する可能性もないわけではではありません。適宜異なる学習パターンを導入することも効果的だと思います。各レベルの授業内容については、以下を参考にご計画ください。

(1) Advanced Level

- ① スタンダードコースのどのユニットを選択するかは各教員の判断に委ねる。1 期で最低 8 ユニットの学習を目標にする。
- ② ユニットの学習と英文法の学習を連動させ、適宜英文法コースを学習させる。
- ③ スタンダードコース以外に、担当クラスの学生のレベル・関心に基づき、Moodle（コース・マネジメント・システム）などを活用して、自主教材による発展学習を行なう。
- ④ 課題学習については必ず小テストあるいはレポートで確認する。
- ⑤ NetAcademy2 のインプット型の学習をアウトプット型の学習へと発展させる。
- ⑥ パソコンの画面でクリックするだけの学習だけでなく、紙に書くなどの学習も適宜追加する。

(2) Intermediate Level

- ① 基礎コースの星 2 つ以上のユニットを各教員の判断で選択する。1 期で最低 8 ユニット程度の学習を目標とする。
- ② ユニットの学習と英文法の学習を連動させ、適宜英文法コースを学習させる。
- ③ 基礎コース以外に、担当クラスの学生のレベル・関心に基づき、Moodle（コース・マネジメント・システム）などを活用して、必要に応じて自主教材も使用する。

- ④ 課題学習については各学生の学習履歴をチェックし、小テストあるいはレポートで確認する。
- ⑤ NetAcademy 2 のインプット型の学習をアウトプット型の学習へと発展させる。
- ⑥ パソコンの画面でクリックするだけの学習だけでなく、紙に書くなどの学習も適宜追加する。

(3) Novice Level

- ① 基礎コースの星 1 つのユニットから始める。どのユニットを選択するかは各教員の判断に委ねる。1 期で最低 8 ユニットの学習を目標とする。
- ② ユニットの学習と英文法の学習を連動させ、英文法の項目を初歩から説明したうえで、適宜英文法コースを学習させる。
- ③ 課題学習については必ず小テストあるいはレポートで確認する。
- ④ 各学生に到達可能な学習目標を設定させ、その目標に向かって持続的に学習する習慣をつけさせる。
- ⑤ 適宜自主教材を追加してもよい。
- ⑥ パソコンの画面でクリックするだけの学習だけでなく、紙に書くなどの学習も適宜追加する。

III. 課題学習について

- (1) NetAcademy2 は自宅アクセスが可能になるが、課題学習は指定された曜日・時限で行なうことを学生に徹底する。
- (2) 英語学習アドバイザーが毎時限出席をとり、出席管理を綿密に行なう。
- (3) 各教員が課題学習の重要性を学生に伝え、毎週の課題を Moodle (コース・マネジメント・システム) にアップロードする、あるいは学習アドバイザーに直接連絡するなどして、課題が何かを学生に明確に伝え、必要であれば、英語学習アドバイザーが学生をサポートできるようにする。

※ Advanced の学生にはチャレンジングな課題を与える必要がある。

- (4) アルク教育社と協力し、基礎コースを題材とした課題学習用のワークブックを作成しました。小テストもついています。Intermediate Level, Novice Level では可能な限りこのワークブックを活用いただければ幸いです。ワークブックの詳細は 3 月 12 日の FD ミーティングの際にご紹介します。

IV. 機器について

各英語 e ラーニング教室に可動式の DVD、プロジェクター、スクリーン (40 インチ) 一式が設置されています。

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

V. 英語学習アドバイザーによる個別カウンセリングとワークショップ

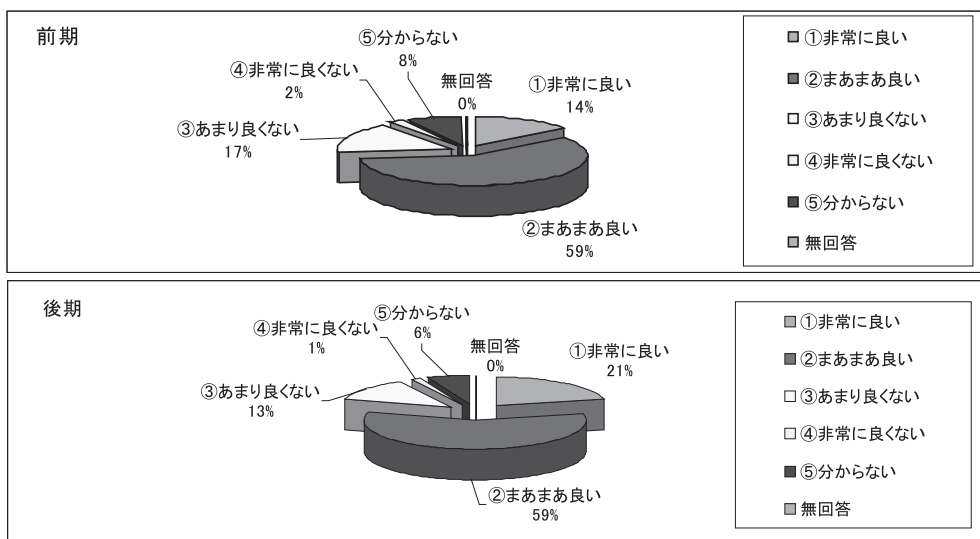
今年度から、英語学習アドバイザーによる個別カウンセリングを始めました。学習アドバイザーの皆さんの積極的な取り組みのおかげで多くの学生がカウンセリングに訪れました。また、学習法などのワークショップなども開催していただき、学生から「とても役に立った」と高い評価を得ました。

来年度は、今年度半ばに学内に開設された学習センターとも連携しながら、この取り組みをさらに拡充していきたいと考えております。

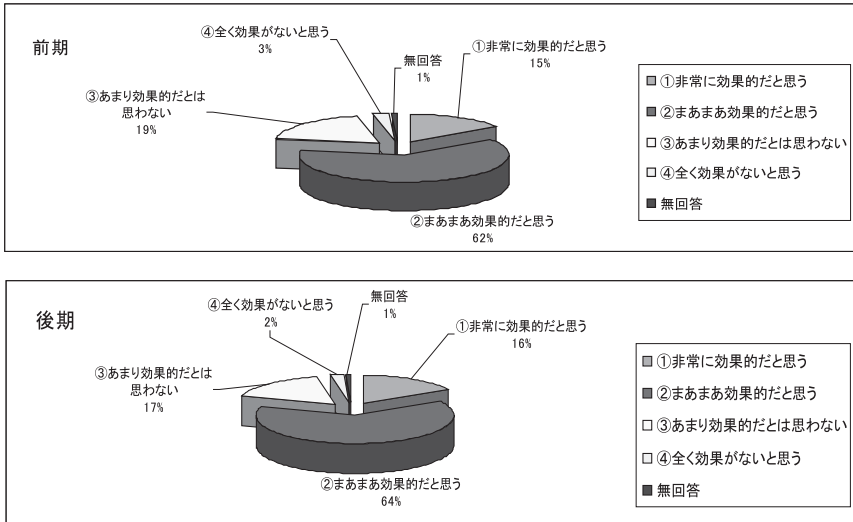
VI. Moodle（コース・マネジメント・システム）については、既に多くの先生方に活用していただいておりますが処理速度が遅いなどの問題点がありました。そこで来年度は専用サーバーを購入し、より快適に作業をこなせるようにしたいと思います。まだ Moodle を授業に取り入れていない先生方にも、今後はぜひ積極的に活用していただきたいと考えております。FD ミーティングが開催される 3 月 12 日の午前中に、Moodle 講習会を実施しますので都合がつくようでしたらぜひご出席ください（新規に英語 e ラーニングをご担当いただく先生は同時間に実施する NetAcademy 講習会にご出席ください）。

付録 2：2007 年度の「英語 e ラーニング」に関する学生アンケート調査の結果

「eラーニング」という方法で英語を 学習することをどう思いますか。



「英語eラーニング I」は全般的な英語の基礎力をつけるうえで
効果的だと思いませんか。



付録 3

『ネットアカデミー・基礎英語コース・ワークブック（リーディング編）』Unit 16, p. 69 ②
の「Grammar & Usage of Phrases」部分を可能な限り複写したものは以下のとおりである。

② 「もし～なら，……なのに」と，現在の事実と異なる事柄を述べる

解説

「if + 動詞の過去形を用いた文～ + 助動詞の過去形を使った文 ...」は、「もし仮に～だとすれば，... だろうに」と，現在の事実とは異なる事柄を表すことができます。

例 If I were not sick, I would go to the party.

過去形 助動詞 will の過去形

(もし病気でなければ，パーティーに行くのになあ)

→実際は病気なので，パーティーには行けない（語順は I would go to the party, if I were not sick. としてもよい）。

...damage would occur if this type of earthquake happened in Tokyo today. (最終文)

これらの例のように，「... だろうに，... なのになあ」の部分で用いられる助動詞の定番は，will の過去形の would です。

「英語 e ラーニング」のより発展的な指導法の構築を目指して

次の英文を、下線部に気を付けて、日本語に訳しましょう。

- (1) If you *studied harder*, you *would* make more progress.
- (2) If you *had* a job, you *would* be able to pay your rent.

説明時に使用したプリント

(石黒昭博監修. 2003. 『総合英語 Forest』 4th Edition 東京：桐原書店 参照)

★仮定法の基本★

①仮定法過去 = 現在の仮定を表す (= 現在の事実と異なる事柄)

「もし・・・ならば～だろう」

If + S' + 過去 S + 助動詞過去形 (would, could, might, should) + 動詞の原形～

②仮定法過去完了 = 過去の仮定を表す (= 過去の事実と異なる事柄)

「もし……だったならば, ～ただただろう」

If + S' + 過去完了 (had + 過去分詞)....,

S + 助動詞過去形 (would, could, might, should) + 現在完了 (have + 過去分詞)～

次の英文を日本語に訳しましょう。

1. If I were you, I would not give up.
2. If we had enough medicine, we could save many children.
3. If I were not busy, (続きを作りましょう)
4. If (この部分を作りましょう), we could be in time for the concert.

付録 4：学習記録ノート（一部）



英語のラーニング・学習記録ノート

日付(〇月△日)	テストの点数	学習内容(勉強した範囲)	よく分からなかった点、質問等	その他(感想・コメント等)	自己評価 (A,B,C)	教員 コメント
月 日	点					
月 日	点					
月 日	点					
月 日	点					
月 日	点					